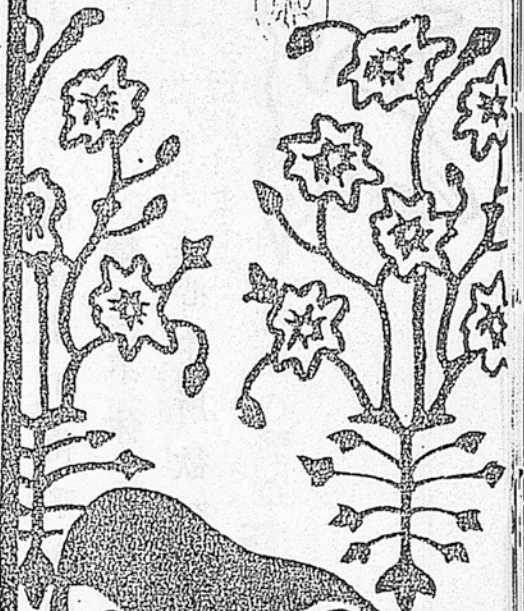
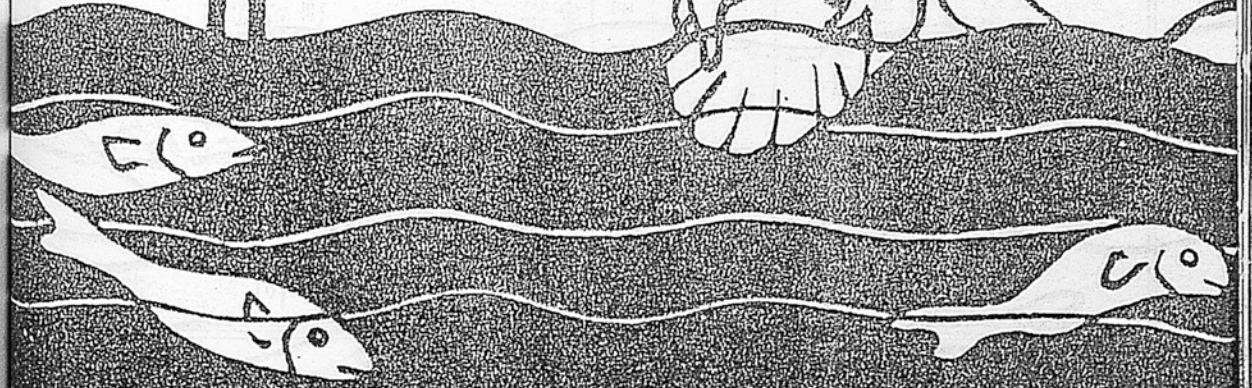
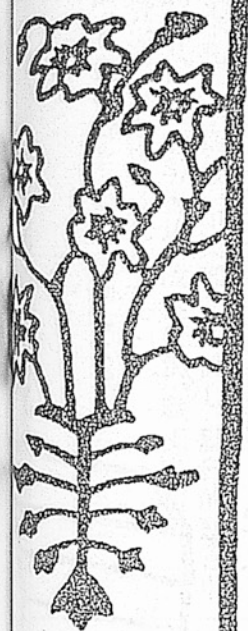


寄



求道

第一卷 第四號



求道第一卷第四號

目次

◎軍國に於ける修養問題	〔社説〕	常盤大定
◎和譯藏經の時期	求道學人	求道學人
◎釋尊降誕會につきて	日曜講話	
◎光	石川成章	石川成章
◎佛と人	北村教嚴	北村教嚴
◎涅槃の極果 園林の遊戯	近角常觀	近角常觀
◎信仰は實感也	同一識味	百目木劍虹
◎無題錄	鈴木卓苗	鈴木卓苗
◎南村閑話	一記	一記
◎佛教の眞髓	毎月教壇	近角常觀
◎漢詩	風尚餘韻	菊池秀言
◎一に		波岡しげる

- ◎いはほ
- ◎花無常
- ◎梅若葉

▲新刊紹介▼

- ◎海外事情
- ◎第二回萬國宗教史大會
- ◎政教時報
- ◎日曜講話◎第二求道會◎編輯餘錄
- ◎米國だより

極尾沾泉
白林
清子

青柳廣雲

日曜講話

毎日曜午前九時より本郷森川町一、求道學會に於て

土曜講話

毎土曜日午後二時より九段佛教俱樂部内第二求道會に於て

求道

第一卷
第四號

求

軍國に於ける修養問題

軍國多事、國民に向て解決を促し來る問題一に何を限らむ。海陸の交戦を初めとして、外交、經濟は勿論、教育内治の方針に至るまで、今や實に空前の一大經驗を試みつゝあり。而して此等諸種の問題の根底として國民が最も注意を拂はざるべからざるものを修養問題なりとす。蓋し修養問題なるものは彼軍事、外交、經濟、教育内治の已外に存するものにあらず。唯軍國一般の事件を處置する上に於て單に技術の巧拙、手腕の如何、數字の計算、訓令の發布に止らずして、猶進んで精神上に於て深き根底を見出すに在り。兵勝てるを以て奮る勿れ、死するも猶退かざるを待め、列國の同情に憑る勿れ、神明佛陀の冥鑑あるを頼とせよ。經濟上の問題は將來必ず一層苦き經驗を嘗めざるべからず。教育内治の方針亦諸種の缺陷を見出すに至るべき也。吾人は決して現時百般の事項完全ならざるを憂へず、寧ろ完全ならざるを覺らざるを憂ふ。吾人は決して過去の過を説くの愚を學はず、寧ろ過を悔むるに吝ならざらむことを欲す。今や國民は正に一大火寶の中にありて鑄鍛せらるゝ者、將來益々一大鍛鍊を経て、以て民性を陶冶すべきの時にあらずや。吾人は茲に開戦已來經驗したる二三の事例につきて教訓を見出し、聊か軍國に於ける修養問題の端緒を開かむと欲する所也。

道

(一)

吾人國民は齷齪たる干渉政治に慣れて自治自制の精神に乏しき確かに其弊の一也。蓋し國民の發達する恰も兒童の發達するが如きか、吾人常に西人か兒童を教育するを見るに、唯自然の發達に任せて其性を矯めざらむことを勉む、而して何事も自ら

試みて自ら覺らしむるを主とするが如し。我國民の兒を育する全く之に異り、親は自ら好むものを與へ、己が欲するの事を教ゆ、困難の來らむとするや兒の未だ知らざるに之に防ぎ、兒は其理由を知らずして親の言を墨守して之を行ふ。哀々たる慈愛到れり盡せりと雖、兒か固有の天真を發揮して、其能力を啓發するに至りては彼西人に孰若ぞや。吾政府者の民を帥ゐる亦此弊を免るゝ能はざるが如し。看よ、日露戦争の開始するや、政府は直ちに經濟上の問題に着眼して勤儉貯蓄の美風を奨勵せり。蓋し邦人金錢を輕むること土芥の如くす、平素と雖其弊を矯むるの必要ある者、特に戦時の如き勝に乘して奢侈に流れ易きに於てをや。既に日清戦争の當時苦き經驗を嘗めたるに非ずや、現今に當りて先覺者が勤儉を唱道せしもの決して不可となさず。然れども之を實行する手段たるや頗る方法を誤れるが如し。國民の多數は内心深く勤儉の必要を感じて之を行ふにあらず。自發的に貯蓄の貴ぶべきを悟れるにあらず、唯政府の命するが儘に之に任するのみ、寧ろ強制的畫一の方針に盲從するに過ぎざるなり。勿論貴金屬を日本銀行に托し、裝飾品を遠けて力を軍國に致すが如き義舉感すべきが如しと雖、其末流に至るや、義務的に之に雷同するが如き嫌なきにあらず。之を要するに深く民心を啓發して將來遠く此良習慣を養成するを主とせず、唯一時に銀行に貯金の多からむことをのみ目的としたるが如し。恰も是れ胃病患者に向て過度の減食を厲行したるが如し。之に於てや忽ち國民の間に變調を來たし、開戦未だ百日ならざるに忽ち反對の説を生じ來りて、戦勝を祝して國民の元氣を鼓舞す可しと唱へ、輿論大に之を歡迎せむとするの傾向あり、何ぞ夫れ此の如く倦み易くして且つ心を轉ずるの速かなる。蓋し此の如きは爲政者が偶然自己の感ずるまに人民に干涉して之を厲行し、國民は唯政府の命する所に盲從して自治自制の精神に乏しきに職由する者、是將來大に發達す可き大國民の器宇と稱するを得べきや否や。

英國民のツランスツァールと戦ふや、初め利あらず。大陸の新聞争て之を嘲笑し。二十世紀に於て必ずや第三等國に下落すべきを言へり。而して英人沈黙業に従ふや恰も事なきが如し、吾人頗る其愛國心を疑ひたりき。既にしてメアキンの聞解くるの電報到着するや、倫敦市中期せずして鼎の沸くが如く、樂隊の吹奏して來れるあり、兒童の行列をなして萬歳を唱ふるあり平素沈黙せる紳士は知ると識らざるとに拘はらず互に相慶し、夫人處女に至るまで孔雀の羽を以て行人と戯るに至れり。忽にして街頭人を以て満たされ、波の如く搖きて、市應に至りて大聲祝意を表し、市長バルコニーに出て、一一之に挨拶す、國民殆むど狂するに似たり。吾人は英人の沈着にして此事あるに驚き且つ前日の默せるや決して冷淡にあらざりしを知るを得たり。而して翌日沈靜なること亦前日の如し、之を我東京市中に於て時として干涉して國旗を出さしめ、或は抑壓して慶意を表するを戒め、一擧一笑皆命令の下に統一せむとするものに比して、何れが國民の自策自勵を促すに適切なる、深く鑑みる所なるべからず。若し夫れ内務省が屢々宗教者に向て訓令を發するが如きに至りては、愚の極なる者、殊に宗教の内容に立入りて其人道的なるを講釋するに至りては所謂釋迦に説法なる者、寧ろ滑稽に近しと謂ふべきか。

吾人國民は神經過敏にして、動もすれば同胞相疑はむとする其弊の一也。彼露探問題の如き之を證して餘あるに非ずや。吾人は國論の必ずしも一致せざる可からずとは言はず、政見の異同時として其説を異にすることなしとせむや。然れども、此の如く各其信する所に立ちて主張する言論は遂に綜合して一種の意味を生ずるもの也。衝突は進歩の初とかや、政黨の對峙、言論の争、此に於てや始めて意味ありと謂ふべきか。印度を略するヘーミングスあれば之を彈劾するエドモンドバークあり、相待つて英國史上に花を添ふるに非ずや。然れども同國人中敵國の探偵ありと言ふが如きは國家の耻辱殆むど常規を逸したるの言、吾人は之を信ぜむと欲するも決して信する能はず。寧ろ飽まで是なきを信する者也。然れども此の如き詖語の行はるゝ決して祥事と云ふべからざる也。蓋し敵國の探偵なるものは我同胞にして母國を賣らむとするもの、國民中此の如きもの存在し得べき理あらむや。此の如きもの存在し得べしと云へる思想なるもの抑々悲むべからずや。確かに是れ少くとも思想上に變調の來り得べき余地の存することを暗示するものにあらずや。吾人宗教的眼光より之を觀るに佛陀が國民の精神的缺陷を指摘して偉大なる教訓を與へ玉ひし者豈戒めざるべけむや。

今や吾人は露探の有無を論ぜむとするものに非ず、唯此の如き聲の行はるゝの甚しきを悲むのみ。一步許して假令露探の存在するあらしむるも、國民の義勇公に奉する其極に達せば何を彼等の隙を窺ふを許さむや。苟も一片の良心の存するものたら

しめば何ぞ同胞が心身を捧ぐるの義戦に向て裏切するを敢てせむや。吾人は決して敵に握手するの手を制せむとするものにあらずして、寧ろ敵に通せむとする心を翻さしめむことを切望するもの也。吾人は強て敵に向て内應するの口を噤せむとするにあらず。此の如き憐むべき内心を愧ぢしめむことを切望するもの也。聞傳らく故大久保内務卿西南の役の起るや、陸奥宗光の潜かに敵に内通することを詳知せり。然れども決して之を逮捕せしめず、川路大警視迫りて之を捕へむことを請ふや、卿從容として却て是れ彼をして自覺せしむるの道に非るを言ひしかや。是固より國家政見の異同によりて生し來りし事件所謂國事犯にして今の場合と大に其趣を異にすと雖、卿か度量の寛宏にして敵をして却て其出づる所を失はしむるもの、吾人聞て其雅懷の欽すべきものあるを感ずるもの也。國民たる者聊か卿か所置に鑑みる所なかるべけむや。

人を疑ふ者は亦人をして自己を疑はしむ、人を攻むる敵なるものは人の過を憐むる所以に非る也。蓋し國民中此の如き不祥の言を傳ふる精神上に於ける惡徵候と云つべき也。吾人は寧ろ此の如き惡聲の絶滅を冀望して止まざる者。國民は須らく漫に外界に於ける蜚語に傾聴せずして寧ろ自己の心頭に向て猛省一番する所ある可し。吾人屢々信仰問題に於て外界の出來事、天然の顯象を以て輕々に看過せずして、探りて以て内心修養の資に供する多し、一陣の風雨、片言の流語、深く自己の内心に胚胎するを悟了せざるべからず。今や社會忽ち此惡聲あり、是れ軍國民が探りて以て修養問題に供すべき好教訓にあらずや。吾人は之を以て他を警むるの聲と見做さずして自ら誠むるの聲たらしめむことを望むこと切也。

且夫れ吾人精神感化の事を見るに惡に酬ゆるに怒を以てし、罪に報ゆるに罰を以てして遂に遷善改過の結果を擧げしを聞かず。怨は怨によりて滅すべからず、怨は愛によりて滅すべしとは實に千古の格言、人を信するものは人を善化せずむば止まざる也。若し徒らに露探を呼ぶこと急なりせば、遂に眞個の露探を生ずるに至らむ。若し同胞の中に決して露探なきことを確信するときは眞個の露探ありと雖忽にして其影を失ふに至る可し。たとひ眞個の露探ありとするも是我同胞たるに非ずや、吾人は彼を追窮して將た何れの地に置かむとするや。若し此の如き聲の大なりせば國民の中、敵の讒をして其便を得せしむる者、國民は流言蜚語に神經を勞するを止めて須らく徹頭徹尾我忠勇なる同胞中此の如き不祥の輩なきことを確信すべき也。

吾人國民は宣戰の理由たる人道正義の點に於て偉大深遠なる自信を抱持すること輕くして、動もすれば森嚴眞摯の態度を缺かむとする其弊の最大なるもの也。夫戰爭は不祥にして干戈は兇器なり、而して猶敢て之を起す所以のもの、我に止むべからざる主張のあるありて、如何に多くの人命と財産とを犠牲に供するも猶狂ぐ可からざる人道正義の存するものあれば也。此人道正義の爲めに國家全軀を擧ぐるも猶之を争はざる可からざるものにして、我帝國は東洋の平和を開闢し、世界の禍源を根絶する使命を荷へる也と云へる確信を抱持すべき也。今や實に國際間に道德の存在するなきが如く誤想するもの多し、是悲むべき見解にあらずや。東洋の平和と云ひ、韓國扶植と云ひ、清國保全といひ、何れも是れ外交的辭令、國際的用語也と看過するものなきにあらず。若果して此の如くむば是、言を人道正義に借りて干戈を弄する者深く戒めざるべけむや。人道は飽迄人道也。正義は千古正義也。豈個人間と國際間との別を問はむや。戰爭は慥かに相對世界の眞相を著しく具體的に顯はし來りたるものにして、絶對の理想より見れば決して善みすべき事に非ざるも、人生相對の間に於て時としては避け得べからざるの事、唯要とする所、其主張する所、其目的とする所、正義公道、彼の絶對の理想界に到達するの階梯たらざるべからず。故に必ず是非曲直彼我の一に在らざるべからず、吾人以爲、戰爭は決して殺人の競争、腕力の勝負に非ず、如何に正理公道に於ける自信力の確實なるかを證明するの試金石也。若し單に言を正義に借りて國家が私慾を縦にするの謂なりせば、所謂暴を以て暴に代ふる者、國に殉し命を捧ぐる者何等の意義を見出すこと能はざるに至らむ。吾人の言を以て迂遠なりと笑ふ勿れ、之を實驗したるものは最も剴切なるを悟らむ。又吾人の言を以て平凡なりと嘲る勿れ、眞理は常に平凡の間に存在するものなれば也。吾人をして忌憚なく言はしめよ我國民か此迂遠に甘んずべく、あまり敏捷に非ざるか。此平凡を確信すべくあまり巧者に非るか、言ふ事は易く、信する事は難し、唱る事は易く、守ることは難し。日清戰爭の時、國民常に敵國の無禮を怒る、怒固より嘉すべきに非るも態度頗る眞面目也。日露戰爭に至りて動もすれば國民巷に説きて曰く、我は戰に巧也、猶進みて外交に巧ならざるべからずと。嗚呼巧の一字我國民の仇敵也、吾人は廣瀬中佐が退くに如何に巧ならざりしかに感泣するもの也。マカロフが身を顧るに如何に巧ならざりしかに敬服する者也。山路將軍の旅順を陥る、謀の巧なりしに非ず氣敵を敵へば也。三國

の干渉に屈服せし外交の巧ならざりしに非ず、信ずることの淺ければ也。抑々巧は驕を生じ、驕は怠を生じ、怠は敗を生ず、吾人を以て不祥の言を爲すものと怒る勿れ。戰勝謳歌の聲人を聳せむとするの間此一語肅然として耳を傾くべからずや。人道正義の主張、佛陀冥護の確信、是軍國民が脊々服膺して一日も空しくすべからざる用意也。吾人は敵國艦隊の沈没、八百人の生靈一瞬の間に魚腹の中に葬り去られしを聞き、愀然として心を寒からしむるものなり。實に彼等も世界平和の爲めに命を捧げたるものなれば也。敵國の首府、上下三日、慟哭祈禱を捧げしを聞きて、吾人は寧ろ其態度の眞摯なるに感ずる者也。彼等は國際間の道徳を證明すべく苦き經驗を嘗むるものなれば也。敵たるの故を以て彼の無辜の蒼生に同情を運ぶ能はざるが如きは人道を解するものに非ざる也。宗教は必しも戰爭に超然たるが如く考ふるものは未だ信仰の經驗なき思想也。實に吾人宗教者が國債の勸募、敵國降伏の祈禱を標榜して政府に阿り、國民に諂り其本領を忘失するの陋を憐み、亦戰爭の罪惡を妄呼して徒らに危矯の言を放ち、國民を善導するの念の乏しきを悲む。吾人はマツギ女史が國家の障壁を脱して博愛看護の事に當らむとするを感謝すると共に、ニコライ氏が其教會の立場よりして飽迄其母國の爲めに盡さむとするをも了解する者也。人道は決して言論として價値あるものにあらず、之を行ふ事によりて價値あるなり。若し之を行はむとするや、干戈鋒鏑の間に之を行ふことを得べき也。宗教は必しも一致するものに非ず、唯信する事によりて各其根底を見出す也。若し根底を見出さむか却て是れ戰時に於ける國民の自信となる者也。近時政府者訓令して今回の戰爭は宗教の異同に關係あらざるを説く、是國民をして排外的謬想を除かしむるに可、又宗教者は海外に檄して亦之を説かむとするもの、如し、是或は彼黄色禍の誤解を正すの一方便ならむか。何れも是れ注意周到にして内外に於ける謬想誤解を排除するの利益あるべしと雖、吾人は寧ろ、他の誤解を恐るゝよりも寧ろ國民が其主張を確信するに一層眞摯にして、宗教者は其本領を發揮すること一層忠實ならむことを望むもの也。若し眼中正義公道と佛天の冥鑑あらば何ぞ他に對して容作るの要あらむ。

聊か軍國に於ける二三の問題を捕へ來りて國民修養の一端に資す。若し之を以て類推せば眼前幾多の好題目の提出せらるゝを見む。

和譯藏經の時期

常盤 大定

人は智によりてのみ生くるものにあらず、人世を動かすものは當に眞のみに限らざるなり。人世若し眞のみの支配に成り。人心の向ふ所眞のみに限れりとせんか、人生は全く冷たして枯木の如く死灰の如くなるに至るべし。幸に情の動くあり、情の動く所美を要求して已まず。是に於てか、詩歌文學あり、音樂あり、繪畫彫刻あり、眼耳心意の美感を満足し、以て人に血あり涙あり、世に溫潤あり雅致あらしむ。宗教は智情意の三者合様の要求に應じ、眞善美の三者調和醇熟の上に顯現する妙用なるを以て、獨り眞理の鼓吹にのみ心を勞するも、恐くは宗教の妙用を發揮するを得ざらん。宗教門内文藝の切要なる、蓋し是人心自然の要求に外ならざるなり。伽藍に入りて之を見るに、四圍の金壁の燦爛たるあり、梁欄の彫刻の巧緻を極むるあり、立花を供へ、燈明を捧げ、香を炷き樂を奏し、七寶莊嚴の間に寂靜端嚴なる尊像を安置し、學

止溫籍にして和顏愛語なる僧伽、禮拜恭敬以て讚嘆諷誦の舉に出づ。之に見、之を聴き、之を味ふもの、誰か歡喜鑽仰の念に滿ち、稽首歸命の首を垂れざらんや。時に或は之を形式と斥し、取るに足らざる儀禮なりといふものあらん、然れど

も儀禮の原因は實に是人心の根底に、伏在するもの、人心自然の要求が人を驅りて斯る儀禮を現出せしめしものにあらざるか。優婆迦婆羅門をして渴仰の情に堪へざらしめし大聖牟尼の容儀、舍利弗をして、忽ちに歸佛の因縁を結ばしめし馬勝尊者の態度、是即ち美の力用なり。幾萬の民衆の眼を覺ませし祇園精舎の鐘の響、數千載に互りて供養恭敬の誠を輸せしめし菩提樹の蔭、美の人を動かす事如何ばかりぞ。華氏城の士女を狂せしめし馬鳴大士の妙曲、五天の道俗を風靡せし摩啞里制多の讚咏、阿育大王の經營に成りし八万四千の寶塔月氏國王の奨勵に基きし健駄羅式の建築、數へ來れば文藝の宗教に於ける影響功用何ぞ之を冷眼視するを得んや。

今文學と佛教との消長に就て、聊か美感の宗教に及ぼせる影響を見ん。釋尊が五印に獨歩せる原因は、王族たりし事、六年の修道を敢行せる事、人格の圓滿なりし事、平等の慈悲によりて一切を包容せられし事、五十年の活動を持續せる事等、幾多の原因相縁りし結果たるべしと雖。縱横自在直に他の肺腑を貫きし譬喩因縁談、時に應じ機に臨みて能く現實を美化せし本生本事談、亦大に興りて力ありと爲さざるを得ず。根本佛教を拉し來りて之を檢せよ、實に是富贍なる詩想を以て充滿する一大文學ならずや。之を文學と爲し了するは頗る輕蔑するものなりと雖、若し之を以て眞を体し善に應せる美妙の大文字なりといはゞ、敢て失當にあらざらん。爾來二百

年、佛陀の感化は教團の間に躍動して、僧伽の行法作儀自ら美を物化せる觀を呈し、阿育大王に至りて聖典編纂の舉あり譬喻經、本生經等は實に其重要なる部分を占め、爾來教團隆盛の結果として分派は更に分派を重ね、所謂十八部の爭論あるに至りて、討究分析の弊風堪ふべからず、教團切に荒涼の狀況あり。此時に中りて美によりて之を統し、再ひ佛教を中天に張れるものを馬鳴大士法救尊者等の力と爲す。其後亦理談に傾き、空有の喧嘩底止する所なきに至りて、長く其聲息を潜めし國民教は、大に佛教に戒め、且つ倣ふ所あり、新に富蘭那文學の形を以て復活し來り、其勢の猖獗遂に當るべからざるものあり。印度の佛教はこゝに全く其跡を收め、佛教東漸の實全く成れり。支那の佛教や、一念三千の妙理、十玄六相の玄談、人を驅りて三千里外に徇徻せしむるものありと雖、然れども四百餘洲を風靡せしものは實に彼に非ずして、盧山の流を汲める念佛に非んば、新に印度より傳來せる眞言秘密の法なり。念佛は是眞を美化せるものにして、眞言は是美を物化せるものと見るを得べし。念佛は詩想湧くが如き善導大師の大文學によりて大に鼓吹せられ、眞言は威儀衆を服せる不空金剛智の陀羅尼によりて其基礎を築けり。我邦に至りてや、王朝時代の佛教は全く貴族的にして、現時より之を見れば稍過去に落謝せるが如き觀あり。鎌倉時代に至りて所謂日本佛教全く成り。就中親鸞上人の活文學によりて大成

しと雖、今や本邦は露國と事を構へ、百戰百勝の勞あり。大和民族は遂に是東洋の一隅に踞蹠するものにあらずして、將來世界の日本たる降域に進まんとす。國民皆此自覺を有す佛徒何ぞ又此自覺を欠くへけん。此自覺を有する日本佛徒の職責は、日本佛教をして世界の佛教たらしむるに至りて極まるに非ずや。之を爲すの第一着手は、先づ和藏を有し、よりて以て大に佛教文學を振起するにあり、然らば和藏を爲すは、國民的自覺を有する佛徒の第一の責務にして、抑も亦聖典の力用を廣からしむるもの、是實に佛教本來の眞面目を發揮するものたるなり。

佛教思想の日本文學に於ける、實に母子の關係を有す。王朝以來、鎌倉足利時代を通して、若し日本文學より佛教思想を除去せば殘る所幾何ぞ。唯之を古にしては奈良朝、之を後にしては徳川時代のみ、佛教思想を離れたる文學を有すと雖、亦佛教思想の影響なくんばあらず。佛教思想の日本文學に於ける交渉斯の如く大なるにも關らず、而も純粹の佛教文學として見つべきものは、實に僅少なるは何ぞ。他なし、和譯藏經なかりしに基かずんばあらず。若し之ありしならば、日本文學の發達、或は之に止まらざりしならんも知るべからず。然れども既住は之を言ふを要せず、戒むべきは將來にあり。今や國民的自覺大に振起し、美術は今後益々世界の美術たらん。政治は愈々世界の政治たらん。日本文學の隆盛は必ずや

せる淨土教、實に日本佛教の面目を宇内に發揚す。是實に日本の宗教にして、亦實に世界の宗教たるべき眞價を有す。而して此宗教たる。一面より見れば、全く是活力を有せる一大文學たらずんばあらず。他語以て之を謂へば、之を大成せるものは、偏へに文學の力に籍らすんばあざるなり。

三國に互りて佛教と文學との關係消長の跡斯の如し。宗教に意あるもの、眞の一面に留意すると共に、美の他面を看過して可ならんや。之に關して予の大に絶叫せんとするは、佛教文學の振興にあり、之が第一着手として先づ其必要を認むるは、和譯藏經の完成にありと爲す。彼バイブルを見ずや、之が翻譯は實に三十餘の國語に互れりといふに非ずや。佛教の聖典を見るに、印度にありては先づ俗語藏あり、巴利藏あり、又華文藏あり。東漸しては漢譯あり、滿譯あり、蒙古譯あり、西藏譯あり、又暹羅譯あり、鞏近又英佛獨露の諸譯の漸次出版を見るあり。而して我邦にありては之か傳來は實に千有余年の古に存し、斯の如く隆盛を極むるに關せず、未だ和藏の企圖なかりしは、抑も是日本佛教の一大欠點ならずや。從來にありては漢藏によりて或は不便を感ずること、甚しからざりしものありしならんと雖、今後漸く之か不便を感ずること、年を追ひ劇甚を加ふるものあるべく、今後幾年の後に至らば、或は恐る漢藏の効力殆んと絶無に歸せんを。國民的自覺の乏しかりし古にありては、之か和譯なき素と其所なり

此明治の時期に中りて、世界を刮目せしむるものあらん。佛教文學の振起豈又此時期を外にして他に之を求むべけんや。予が此時に際して先づ和藏の出現を望む、決して偶然に非ず且つや戰爭と宗教とは密接の關係を有するもの、戦後の人心に留意し、戦後の世道に懸念する佛徒、竊かにこゝに慮る所なくして所ならんや。

釋尊降誕會につきて

(附大日本佛教青年會にうながす)

求道 學人

天はもろくの瑞相を下して是一大事實を宣揚せり、蓮花繽紛として地に亂れ落ち、人之に觸るれば妙樂全身に徹す、日月は常の如くわたれども光輝益明かなり、もろくの光と火とは薪油なくして燃ゆ、清泉自然に地より湧き出て、ランビニ園の上には、天樂雲の如くあつまり、時ならざるに花咲けり、邪曲なるものは一時に慈悲を生じ、

病めるものは療せずして自づから癒え、
猛獸凶鳥寂然として聲をひそめ、
万川流をとめ水の濁れるもの悉く澄む、
空には一點の雲なく、

天鼓自然になりて、
八方世界の音等しく救世主の降誕を讚美せり、
唯欲界の大魔王のみ獨り憂ひなやめり、
之を讀むもの果して如何の感かある、これ誇張のみ迷妄の
みと排せんものは止みぬ、苟も想を、遠く三千年前の暗黒世
界印度の一國に於て、まことに偉人の面影を瞻仰し得たる當
時の國民の感果して如何なりしかに、懸くるものあらば、請
ふ來つて吾等と共にその三千年の昔を忍ばんかな、

蓋し偉人の出現するや、その時代その國土の、必ず暗黒に
して正邪其所を代へ、義人烈士の窮迫する所なるが、釋尊
の印度マカダ國に生れ玉へる時や、上なるものは、その位置
と威力とを以て下をしいたげ、下は暗涙を吞んで世に天日の
暖かさを知らざらんとす、書をよみ道を習ふものは、その修
得と道力とを以て蒙昧を嘲けり、昧者は道を得るに光なくし
て常に味し、かゝる時に當りて天の一方より聲あり、偉人佛
陀生る」とあ、彼等の驚喜如何なりしとするぞ、今こゝにそ
の心情を推すも敢て當つべきと難かるべし、カライルは人
生崇拜の起る其驚喜の情に初まるとなせるもの、まことに以

こゝろ無きこと、今日の如くんば、何の詮する所ぞ、エマ
ソンが、宗教の眞髓を説いて道義的感情にありとなし、而し
て「人の信仰上の幻像が明かなるを得て偉大なる功力を奏す
るは文學の力に依らず、神學の力に依らず、唯人が、世に稀
なる程の誠實の情を顯はすと、天來の徳風を着けて絶ゆるこ
となき愛情を起すに由るなり」と言へるもの眞に當れりと
言ふべきより、

之を考ふるに降誕會はたゞ教祖の芳烈を慕ふて相會し、相
歌ひて偉人の出現を紀念するに止まらず、又之を以て宗教の
生命をつなぎ、信仰の火に薪をつくものなりといふも不可な
きなり、

しからは降誕會は如何に催さるべきか、
吾等釋尊涅槃の像を拜するときに、毎に一種の感を以て打
たるゝあり、その徳化の如何に廣大なりしや想ふに堪へざる
なり、見よ、尊骸をめぐり愁嘆にくるゝ弟子門徒の上に、諸天
善神の來りてこの壯嚴なる一大事實を證するが如く、又下に
は沙羅双樹の根元に集へる數千の鳥獸群畜の、首をあげ足を
曲げて哀情止みがたさが如きを、この好箇の紀念畫をば、吾等
久しく唯佛間に飾り忘れたりしを憾みとすべし、かくの如き
紀念畫が釋尊の降誕に關して、つくられたるを聞かざるも、
今假りに佛所行讚經その他によりて之をつくらば、必ずやか
の涅槃像に類するものを得べし、

て釋尊降誕の時に於ける彼等の心情を推すべきか、しかり實
に彼等はむしる崇拜を以てこの偉人を地上にいつきまつりぬ
よく世の様を知れる人よ、暗黒の時は三千年の昔のみなら
じ、今の時今の世、あゝ吾等心を潜めて之を想へば、何處に
生命の泉をたづね、何時か又信仰の光を認むべきや、しから
ば今の世は暗黒ならずや、しかり何れの世か暗黒ならざらむ
こゝに於てか、人に戀の泉のつさせぬ如く世に偉人を瞻仰す
るこゝろの止むべきなし、受兒を失へる人の死兒の跡を繰る
ことを笑ふなかれ、吾等はもだしがたき渴仰の炎をは遠く歴
史の源にかゝけて自ら慰むるや、
こゝに降誕會成り、宗教昌ゆ、

花に見よ、年々歳々花等しく開けど、春風その香を送れば
樹下未だ人の群を絶たず、あゝ花に靈ありて万人これに赴く
や、將た人にこゝろありて花を慕ふや、唯蜂蝶の如く花をめ
ぐりて行く春をなげく、しかるを、釋尊一度び逝いてより、
ルンビニの園春を重ぬれども、遂に再び丈六の金身を見上ら
ず、されば歳々年々人全じからざるに馴れてや、人生の威嚴
を忘れ偉人の英姿は地の上にまた見るべからざるが如く思ふ
に至れるなり、かゝる時に生れ會ひたる吾等は、唯ひたすら
に釋尊の芳烈を慕ひより、打集りて、こゝに「花まつり」をい
となみ、讚佛の歌をうたふ、世に宗教の聲喧しく、信仰の叫
高くとも、その精髓たるべき「渴仰のまこと」を欠き「讚歎の

推するに釋尊が四月八日、ルンビニ園無憂樹のもとに於て
群臣の祝福と蒼民歡呼の中に、靜かに母胎を出て玉へるとき
に於て、「第一回釋尊降誕會」を地上に見たりとするに不可な
からむか、面のあたり金身を見上れるもの、或は遠くその出
現を傳へ聞けるもの、皆唯暗夜に燈を得たるが如く、貧人の
寶を得たるが如く、欣喜雀躍して、ひたすら祝福にあくがれ
けむ、

されば、その時の降誕會は、佛教清徒同志會の如き主義の
集りにあらず、又法幢を翻し法鼓を鳴すの傳道布教の會にあ
らず、又今日見るが如き國威宣揚の祈禱會にもあらず、歌な
らはたゞこの一大事實に接して驚嘆のあまりに發せる叫びな
り、舞ならば、このうるはしさに酔ふてなせる躍りなり、も
しそれ涙ならば、この莊嚴に打たれてなせる沈黙の祈より出
でしなり、

吾等の年々いとなみ來れる降誕會は、まことにかくの如く
にして初まりしか、

しからは今日の降誕會は如何なりや、
今暫く、本年東京に於て行はれたる大日本佛教青年會のそ
れを見るべし、

四月八日午後一時、錦城館階下に於てひらかる、會場の正
面に高さ臺を築き、その上に花御堂をしつらひ、誕生佛安ら
かに天土地維を指し玉ふ、やゝへだゝりて、前に、花瓶の花

にみてる、演臺とが置かる、式は齋藤唯信師の頌詩を以て開かれ、次で泉幹事の開辭あり、これに境野、齋藤、井上(圓)井上(哲)村上諸師の演説つく、黄昏に及びて一先づ會を散じ、更に茶話會を階上に於て催す、こゝには假りにしつらひたる舞臺ありて眞先きに狂言役者出てたり、「やるまいぞ」にて幕となり、それよりは講談及び薩摩琵琶ありて、會は全く閉ぢられたり、唯一事の忘却すべからざるは、會員の一人が翹舞をなしたることなり、會費二十錢、菓子一包をうく。

上に記する所は、元より大略なりと雖も、しかもその骸骨を傳へてあやまらざるを信ず、而してかゝるやり方の降誕會は、かの寺院に於て行はるゝものを除きて、天下の敢て摸せんとする所なるべきか、

今こゝに一々批評せんことの煩はしきを避けて、當時わが感得したる所を披瀝するに止めむ、われは一年一日なるこの「花まつり」の日に於て、道學者の物するが如き獨尊説をさくべしとは、夢想だにせざりき、ましてや、かの所謂氣燄なるものを聞かんことをや、唯僅かに村上博士の宏辯によりて、わが胸のもだえを溶かし去りたれども、心奥ゆるやかに、三年の當時を想ひ浮べてそこに現の如き力と信仰とを感得することなくしてやみぬるや中々遺憾なる、菓子の一包を握りて、階上の餘興に心くる、時として、僅かばかりも世尊の宏徳を想ひ浮べ、またはその芳烈に奮ひ起つが如き心地せて、渦の如

自由に入會することを得るとさだめ、ひたすら世尊を瞻仰し上らむとて集ひ來らむ男女老幼をば、洩れなく「花まつり」の席に加へしめむことを念したり、式の後に行へる演説會より又餘興に組み入れたる會員及その他の藝術の類に至るまで、皆悉く當日會員の寄贈となし、一も遊興として之を雇ふことを止めたり、故に苟も遊藝を以て立つ者の、それを以て至尊の降誕を祝福せんと請ふものあれば、喜んで之を受くることとなしたれば、少年青年の會員より成年老年の士女に至るまで、皆各自の天資と藝術とを以て「花まつり」に貢獻したり、昔オリンピヤの競技もかくの如くにして神致に達したりしならむとぞ思はれける、されば彼等の發言するか如く、この降誕會は青年會が當番となりて奔走盡力せしのみにて實際は數千の會員の人人が共に協力してこの盛會をあぐるものなりとの自覺を全体に引き起さしめたり、されば會員の寄贈になれる遊藝の中には、淨瑠璃ドラマの如きものありしと雖も、未だ嘗て降誕會の尊嚴を犯すことなきのみならず、皆々まことに友愛の情に催されて、この聖日を祝福し得たるを喜ぶが如くにして散會したり、

こは元より其大体に過さずと雖も、其抱負の原始的にして且つ宏壯なるものありて存するを了すべし、

我帝都に於て毎年四月八日釋尊降誕會をいとなむべき恰好なる代表者はまことに大日本青年會なるべし、こは青年有識

き人波にもまれ、そこを出てぬ、かゝることは、われ自らの感にして、之を以て直ちに青年會の事業を上下すること能はずと雖も、請ふ試に想へ、當日かくの如き準備と努力とを以て營みたる釋尊降誕會が、人の心裡に與へたる印象が、唯僅かに天狗獨尊説と忠僕直助の傳に過ぎずとせば青年會たるもの何を以て之を辨すべきや、ある會員は言へり、「今日予の得たる所は忠僕直助の傳なり」とわれは青年會は何故に釋迦傳を撰ばざりしやを怪みぬ、更に想へ、會は全く閉ぢられ、千餘の人々が細き一筋道を下り行かざるべからざる時に際して、ある多數の者は實に障子を推しやぶりてその先を争へるを見たることを、あゝ、かゝる暴狀の發現は、彼の劇場に於てすら稀に見る所にあらずや、しかり、當日は、演劇が吾人に與ふるほどの印象をも會員に與ふる所あらざりしなり、

われは、釋尊降誕會について、其好箇の模範を仙臺に於て見たりき、等しくその地の青年會のいとなみたる所なるが、最も原始的意義を保存し、且つ又其理想とする所の、甚だ壯美なるものありて存せり、今少しく之を述べて、以てわがこれに關する意見に代へむとす、

かの青年會は主唱となりて、仙臺市の各所に於ける降誕會を糾合し、全力をあつめて、そこに救佛の響をあげむとを志とし、之を實現せりしなり、成る丈け廣濶なる會場を撰びて普く之を廣告し、入場料として數金を投すれば、何人と雖も

者の團體にして、且つ諸學校を連ぬるものなれば、彼等が能く宏壯なる抱負と熱心なる努力とを以てなす所あらば其降誕會たるのみならず蓋し何等の事業と雖も美果を生ぜざるものなかるべし、

今や「法を一人の歴史にこめて之を拜せる吾人が祖先の時代は早や過ぎ去りて、眞に法の永遠無窮にして我にも爾にも存し將た禽獸にも聖經にも等しき力を以て存するを悟り之を拜するの時代將に來らむとす」舊きことは舊き人に委ぬべしこゝに清新なる希望と、宏壯なる抱負とを以て立つ者なくんば、遂に我佛敎の前途に光明を見るべからざらむ、

東京には上野あり、上野には櫻あり、此櫻の下蔭に開展せる廣地は實に我が青年會の降誕會をいとなむべき所ならむか、一國の文明と力が皆東都を源泉として流れ出づることを知らば、こゝに於ていとまれたる降誕會は、やがて「大日本釋尊降誕會」なるべきを知らむ、しかり已にしかるあらば、これまことに「東洋釋尊降誕會」なるべきなり、敢て問ふ、大日本青年會諸子には、果して這底の抱負ありや否や、記して自ら警む、(完)

* 人は彼を見て運命と誤解せり、彼は暗路を歩るが爲めに來ることの運命なり、されど如何なる場合にも彼は其期に接せんには、來て、眞を賞して憐れを問す可し。 エマーソン

日曜講話

光

石川 成章

本日は光といふ題を出して置きました、私は平日から此方面に就て多少見聞して居ります故に修養に對する考も幾何か此方面より來て居りますれば、此題を掲げて置いたのであります、これに就て私は二つに別けて御話致さうと思ひます一は物質界の光又一は心靈界の光、物質界の方は科學者の研究する處の光、心靈界の方は即宗教家の感する光であります、今假りに物質界の光を物光と名け心靈界の光を靈光と名けます、

私が平生物光の事を見聞致しまするに就て如何に靈光を感じて居りますかといふ事を開陳しようと思ひます、物光の大本源は申すまでもなく太陽であります、我々人類を始め諸有生物は皆此太陽の光と熱とによりて生活して居るのであります、若し此光と熱が無ければ生物の生活は總て持續せられぬのであります、今日の如く春陽驕蕩麗ら、かな氣候となり、桃も開き櫻も咲き世界は恰も花の錦を以て飾られ燦爛眼を眩するが如き者これ全く太陽の光と熱の賜であります、然し今日地質學の研究に依りますと、大昔には今日の如く奇麗な花は勿論全幹花の咲く植物杯は少しも無かつた時代がある

ります、地質學上では此地球が出來てから今日に至りまする時代を別ちまして太古代(Archæan)古生代(Palæozoic)中生代(Mesozoic)新生代(Cainozoic)と如斯四期に別つてあります、其第一の太古代には動物も植物も總て生物といふものは無かつたのであります、第二の古生代になりまると、極劣等の動物植物が顯はれて居ります、是等は往々化石となつて今日残りて居ります、動物の方は後で申上げましょうが、此時代に顯はれました植物は何れも皆隱花植物であります、例へば羊齒類、木賊科、石松科、鱗木封印木蘆木等の類で顯花植物は更に無かつたのであります、第三の中生代には裸子植物の類で松柏科蘇鉄科及び單子葉植物の或るもの等が顯れまして漸く顯花植物を見たのであります、第四の新生代に至りましては高等なる顯花植物の繁茂する時期となりまして被子、双子葉植物、即梅、桃、櫻、木蓮、海棠、菊、柳、梨杯があります、これによりて見ますれば唯一本の草や木が發芽し生長し花咲き實るといふ事が太陽の熱と光の賜であるのみならず、もつと長く考へて植物といふものが始めて此世界に顯はれて而して極下等の植物より今日の百花美を競ふ高等の植物を生ずべく進化發達を促せし第一要素は全く此太陽の光と熱の賜に外ならぬのであります、次に動物の方について申上げますれば、前にも申上げし如く太古代には殆んど動物も顯はれては居りませぬ、其後古生代の志留利亞時代には始めて魚類が顯はれました、次で石炭紀には兩棲類が初現し二疊紀には爬蟲類が始めて現はれました、續て第三の中生代に至りまして爬虫類の旺盛時代となり哺乳類、鳥類が始めて現れました、而して我

々人類の如きは漸く新生代の中頃に於て初めて現はれたのであります、そこで考へて見まするに動物も植物の如く先づ軟體動物の如き下等のものより漸次進化發達して遂に人類の如き高等なるものが現出するに至つたのであります、決して突然に高等なるものが現はれずして太古代より新生代の今日に至るまで長日月の間に幾度も變化致し然も繼續し、遂致しましたのであります、是即太陽の光と熱との賜であります、此太陽の光と熱の效能書を一々申し上げて居りますれば日も足らないのであります、要するに世界の一切の活動は殆ど皆光と熱に歸してしまふのであります、只今降て居ります雨も太陽の熱の爲に地上の水分が蒸發して空中に昇りますると空中の冷氣に遇ひて遂に雨となつて降るのであります、若し雨が嫌ひであるといふ人がありますれば沙漠へでも行かねばなりません、然るに御承知の如く沙漠は到底人類の生活には不適當なる地であります、此外風雲流水の諸の活動は大ごとなく皆此光と熱とに據るものであつて、若しこれを除いたならば是等の一切の活動は休止してしまふのであります、

儲かくの如く大なる力を以て居る光熱は如何なるものであるかと進んで考へて見まするに、古來種々の説があつたのであります、先づ往昔有名なるニウトン氏は熱といふものは元來熱の微分子があつて、其が太陽の方から飛て來て地球を暖めるのであると考へて居りました、然しフイゲンズといふ學者が出てまして波動説を唱へ熱はエーテルの波動であると申しました、此説は十九世紀に一般に行はれた説であります、此説では太陽の光及熱が先づ太陽の周圍にあるエーテルに傳

はりますると其波動は遂に九千二百万哩隔つる地球まで僅かに八分間に傳へられるといふのであります、これを吾人は如何にして感じまするか申せば、エーテルの波動が吾人の眼の中にある網膜に達しまするとそれが視神經に熱として感ぜしむるのであります、そこで吾人が注意を要するは吾人が太陽の光を光として感じまする部分は太陽の發しまする波動の極一部分であつて尙外に目に見えざる光が澤山あるのであります、故に太陽の光は見るべき光と見られざる光と二種あるのであります、試みに三稜柱によつて太陽の光を分析して見ますれば御承知の通り七色に別れます、此七色丈が漸く吾人の眼に見えるのであります、其外に赤内光及紫外光といふのがあります、これが即見えざる光であります、而して主に熱と稱するものは赤より内の光であります、化學的作用を爲すは紫より外の光であります、これによりて見ますれば光と申しましたも直ちに目に見ゆるものとは限りませぬ、若し眼に見ゆるもの、みが光であると申しますれば光は實に小部分であります、波の長さの種類でもそうであります、眼に見えざる長さの波の方が實際多いのであります、この物質的光に於きましても眼に見えざるもので驚くべき作用を致しまする尊き光が澤山あるのであります、今日に於ても是迄見えざるが爲めに知らずに觀過致して居りました新しき光りが已に幾何も發見せられました、將來は斯くの如き新光の發見が頻々として起るであらう、先づ今日は太陽の光の外にも多くの放射線のある事を御話致して見ましょう、其前に當りて太陽の熱量に就て御話致しましょう、抑も太陽の

熱は何によりて生ずるか又絶えず熱を放散するものとすれば
 早晚太陽の熱量は消失することは無さかと申しまするに、一
 向熱の減少が目立ちませぬ、其理由は如何と申しまするに
 宇宙に散在する無数の小天體は常に太陽に引附けられて落ち
 る、其太陽に向て落つる時に多くの熱が生じます、太陽は
 此熱を収むるのであります、而して太陽が此時収むる熱と放
 散する熱とは常に平均して居ります故に太陽熱の損失は
 目に立たないのであるといふ説があります、又近頃の發見に
 よればラヂウムといふ物質は小豆大の少塊よりも盛に光熱
 を發するものであるが、これによりて見ますれば太陽の容積
 の一立方尺毎に殆んど三、五グラムのラヂウムがあれば太
 陽の現今發射する熱量を發し得るといふ事である、尙將來の
 研究を待たば一層明にせらるゝてありましよう、

次に太陽の外の光りは第一にレントゲンのX光線でありま
 す、之は已に世人の知る處であるが此光線は通常のものとい
 なり反射屈折を致しませぬ、又普通の光には不透明體のもの
 でも此光の前には透明體となりませぬ、又此光線は空氣を電離
 する性質あり、空氣の電氣に對する抵抗に變化を生ぜしめる
 働を有して居ります、又此X光線を或る物體に申しますれば
 燐光を發します、殊に金剛石、螢石などにあてますれば
 著しく燐光を發します、是等の不思議なる効能を有て居り
 まする爲に種々の働を爲します、或は金剛石の眞偽を鑑定
 し或は肉體内に入り込みたる彈丸杯をもよく見る事が出來ま
 す、此目に見えざる不思議なる放射線は西曆千八百九十五年
 に前申ましたレントゲン(Röntgen)氏によりて發見せられま

した、これより三年を経て佛國のクリー(Curie)氏夫妻はラヂ
 ムを發見致しました、過日帝國大學に於て見ましたが僅か
 にラヂウムの溶液の一滴を針頭に附けたても尙能く線香花
 火の如き光を發します、此光は分析して見まするにABC
 の三種があります、此三種の中で最初のAは餘程能くX光
 線に似て居るといふことであります、BCの方は全く他の
 放射線であります、

クリー氏はピッチブレンドといふ礦物からラヂウムを取り
 ました、この礦物其れ自身も光を發するので、これも帝國
 大學での實驗によりまするに、此礦物の下に寫眞の種板を置
 いて長時間暗室に入れて置きましたのに能く感光したのであ
 ります、是によりて見ますれば此礦物はラヂウムと同じ光を
 發するのであります、其他フアラヂー氏の發見によればアク
 チニウム、ポリウム、ウラニウム等も亦或る光を發する
 といふのであります、斯く實驗によつて未だ見えざる光の澤
 山ある事は御承知になつたてでありましよう、是を以て見れば
 吾人の眼は不完全なものであります、光を見るときいふても僅
 かに其一部分を見るに止まるのであります、物質の光位は見
 えそうなものであるのに、それも見えない哀れなものであり
 ます、然らば心靈界の光は亦是を疑ふ事は出來ないそれはま
 さに心眼を開けば何時でもすぐにそこにあるのであります、
 吾人が眼も開かず光はないと言ふ事は出來ませぬ生來の盲
 者が光はないと云ふのは盲者がわるいのであります、たとひ
 こちは見ざる爲に少しも知らないても向ふの方からは常に光
 を發して居るのであります、

ソコで私が靈界の光を如何様に感じて居るかその感せるま
 まを申して見ませう、云ふ迄もなくこの光とは佛陀の光であ
 りますさればその光を汝は如何に感ずるかと御仰いませう、
 經論によれば佛光は智慧のすがたでこれは何の爲めに照らす
 かと言へば、衆生救済の爲めでありませぬ故にまた慈悲光
 とも申します、何となれば慈悲は佛教では苦を抜くを悲と云
 ひ興樂を慈と申しましてこれが即ち佛陀の心もちであります
 る、吾人を救済し給ひ苦を抜き樂を興ふる其光が即ち佛陀の
 靈光であります、かく申せば或はそんな光は感ぜられずと云
 ふ御方もありませうがそれは心靈界を見る眼がないからであ
 ります、御經の中に阿彌陀佛去此不遠とも説いて常に吾人の
 左右に在ますのは決して疑はれぬ事でありませぬ、總て佛陀の
 光明に逢ふては万物悉く透明體でさらし得るものは無いの
 であります、之を感ずるときは行住座臥如何なる場所如何な
 る時でもこれを仰き奉る事が出来るのであります、吾人は須
 らく心眼を開くべきであります、

太陽の光熱が駭蕩たる春陽を現出するのみならず、之を歴
 史的に見れば萬物を進化し發達せしめる事が分ります、今
 援苦興樂の佛光は吾々一切を隈なく照し給ひ人間の (Condi-
 tion) を Better にして Post に導き實に無窮大に歸せしめん
 爲であります、此點に於て佛陀の光は太陽の光とよく似てあ
 ると思ひます即ち佛光は吾人の精神をして漸次進歩發達せん
 とし給ふなれば一度その縁に逢ひ眼を開けば百華爛熳の心華
 は忽ちこゝに現はれるのであります、故に靈光を感せずと云
 ふはこちらの扉が閉ぢられて居るからして靈光の有無ではない

のであります、然るに若し眼に見えないから無いといふなら
 ば、見えざるに大なる働を爲すX光線を御覺なさい、X光線
 については已に申上りました通りであります、今靈光につき
 ましたも已に多くの人々か救済を受けて大安慰を得て居る事
 實を見るのであります、親鸞上人の和讃の中にも慈光ハルカ
 ニカフラシメ、ヒカリノイタルトコロニハ、法喜ヲウトゾノヘ
 タマフ、大安慰ヲ歸命セヨ、とあります、吾人は直接に靈光を
 見る事は出來ませぬけれども、靈光の働の偉大なる事は照々
 乎として明らかなのであります、人生行路難幾多の困難幾多
 の葛藤は滔々として起りて參ります、佛陀の靈光は能く
 吾人をして泰然自若としてこの風波荒き海に進ましむるので
 あります、是れ實に人生に於ける最大幸福であります、
 殿玉樓に住んで居ましても若し精神上の苦痛がありますれば
 人間最大の不幸であります、X光線もラヂウムも光線も靈
 光の前には無能力であります、心靈界には何の益にも立ちま
 せぬ、吾人を救済し大安慰を興ふる本源は佛光より外に無い
 のであります、此靈光を一旦吾人の心に感じますれば最早疑
 ふ事は出來ませぬ、私が感じて居ります靈光は縱ひ吾人の
 眼は盲となりて居ても常に吾人を照して居ります、佛光は
 無碍であります、無限であります透徹であります、して見れ
 ば己れは感ぜられない杯と心配する必要はありませぬ、煩惱
 ニマナコサヘラレテ、攝取ノ光明見サレトモ、大悲モノウキ
 コトナクテ、ツチニウガミヲテラスナリ、靈光は瞬時として照
 さぬ時はありませぬ、盲者の前にも太陽は常に照して居りま
 する、生來の盲者にして若し眼を開いて一度赫々たる太陽の

光を見る事が出来ましたならば如何に喜ぶてありましよう、我等は無始以來無明の煩惱に閉ぢられて居りますれば種々煩悶し疑惑を生ずるのであります、無明は即闇であります、吾人は生來の心の盲者であります、併しながら此闇が一度靈光の力によりて照破せられますれば恰も東天のしらむが如く明愈々明其極致に致しますれば一陽來復東風水を解き天地の春に逢へるか如く麗はしき信仰の妙華が開くのであります、サテ一旦信仰は得ましても年中長閑な春といふ事は無い如く、或時は感じて嬉しくも或時は全く以前の我となり疑も起り又煩惱も起るのであります、今日の如き四月十六日と申せば春の眞盛であるのに風が吹き雨が降り其上に非常に寒く寒暖計は八九度に降りて一向に氣が冷き立たない、若し青山原頭にても行きますれば實に寒雨肅々といふ様な光景であります、吾人の精神現象も亦實に此通りであります、非常に嬉しい春の如き日もあれば又非常に寂しい冬の如き日もあります、然れば又和讃には濁世の起惡造罪ハ、暴風驟雨ニコトナラス、諸佛コレヲアハレミテ、ス、メテ淨土ニ歸セシメリ、佛を信ぜし後とても惡を起し罪を造り風雨時ならぬのであります、然し佛陀の大慈悲光は決して我等を棄てられませぬ、太陽の光熱とても時に風雨の變はありましても依然として存して居るのであります、さればこそ風雨時に至りましても尚花も咲き鳥も歌ひ矢張春は春であります、全軀が春の陽氣でありますれば再び麗らかなる天候に復するのであります、これが全軀冬の時候でありますれば如何に太陽が照りましたも冬は冬でありて春の如き陽氣に逢ふ事は到底出来ませぬ、吾

佛と人

北村 教 嚴

夫天地の間には一の大なる光があつて、凡てのものが皆この光によりて生命を有ち活動をなしうるのであります。その光りとは即太陽の光であります。されば今日私が宅を出て當席へ参りましたのも、又かく諸兄弟と顔を見合して御話しが出来ますのも一にこの太陽の光のある御蔭で、若し一度太陽が其光をかくして天地が眞の暗となりましたならば、吾々はどう一寸の手出しもありません。處が吾々がかく太陽の光り

を認めまするのも實は吾々に二つの眼があるからであります、もし吾々にこの眼がなかつたなら、如何にうるはしく太陽が輝いて居ても畢竟暗黒世界とちがひはありませぬ。これは吾々の肉体上の話ですが又精神上にも之れと同じ事が存在するので、盲人が太陽を拜むことが出来ないとても太陽は一日も休むことなく、この世界を照耀して目の見える人と、もに目の見えぬ人も同じように養ひ育て居るのであります。今吾々の淺尚敷心にはそれと見ることか叶はぬとも、宇宙の間には別に靈なる光ありて永劫の古より間斷なく輝きわたり、吾々を護持しつゝあるのであります。然るに吾々は今日迄この光りに氣がつかずして、獨り暗路に彷徨ふて居つたのであります。

抑も佛敎は七千餘卷の經論を有し八万四千の法門に分れてありましても、其要をとりて申せば只吾々をしてこの宇宙の靈光に接せしむるの道を教へたに過ぎませぬ、禪宗の直指人心、見性成佛の妙敎、華嚴の十玄六相、相即相入の妙理、天台の一念三千、三諦圓入の妙法等。一としてこの宇宙の靈光所謂本有の佛性を發揮せしむる法たらざるものはありませぬ。そこで御互の精神が肉体のうちに宿りて居るのは、丁度吾々が一室に在りてその戸を閉ぢ窓を掩ふて眠りて居るやうなもので、已に旭日三竿にのぼりて居ても、一向氣がつかない。しかのみならず、少しも明りがさしませぬから、どんなに室が汚れていようと、どんなに醜しき寐姿をして居らうとも少しも知らずに居ると同じだらうと思ひます。所がもし窓に一寸でも透間が出来て、外界の光りがこの暗黒の室を照

すことになりますれば、それを大變。今迄奇麗だと思ふて居た室の中は如何にもきたなく、正しいと思ふてあつた寐姿のいかにも醜く、この光に照されてこの淺間敷有様を見てはもうちつとはしておられぬ。早速飛び起き戸を開き窓を明け、できる丈の掃除もして、隅から隅まで外の光りを通そうとするに違ひありません。今も其の如く、吾々の肉体には目や、耳や、鼻や、口や數多の窓はあり乍ら、一つ一つに丁寧に戸を閉し窓掛をかけて、外界の靈の光りを精神に通じませぬ故、精神は丸て闇黒の内にかくされてあるのであります。この戸や窓掛とは外でもない即ち煩惱であります。佛はこの煩惱を无明とも仰せられてある、无明とは即ちこの靈光に接せざる暗闇の事であります。この无明煩惱が吾々の目や耳を閉ざしてあります爲に、吾々はいつまでたつても光りを見る譯には参りませぬ、この覆ひを取り去らぬ内はいかに教をさし經を讀みましても其甲斐はありませぬ。さり乍ら吾々が見ることが出来なくとも日は已に三竿に達し、宇宙の靈光は久遠劫來吾々を照して止むときはありませぬ。見眞大師の和讃に。

煩惱に眼さへられて 攝取の光明みざれども
 大悲ものうき事なくて 常に吾身をてらすなり

と仰せられたは全くこの處であります。誠に吾々はこの惱煩の爲めに吾々の唯一の救済たるこの光明を見ることが出来なかつたのです。さりながらこの光の主なる大悲の親は淺間敷吾々を御見捨てもなく、一度はこの光を認めさせねばおかぬとの慈悲心より、ものうしとせず常に吾々をてらし玉ひ、

遂に无明の霧も破れて、こゝにわれらの精神が初めて佛目を仰くようになるのであります。さればこの大悲の光りを无明長夜の燈炬なりともたゝえ、又は无明の暗を破するゆへ、智恵光佛となづくる次第であります。

すべて佛教ではこの无明を以て迷ひのもとといたします。迷ひの爲めに業をつくり業の爲めに苦を招き苦の爲めに又迷ひを起しかくて惑業苦の三つは循環して果てしもなく、吾々は暗路より暗路に迷ひ入り、いつ出離生死の大道に出づる事が出来るともわからぬのであります。夫故に先づこの无明を破ることを教へたのが佛教であります。増一阿含經に四種の生死が説いてあります。その第一が暗より暗に入ると云ふので、此世に在りては心愚少智にしてつねに貧窮飢寒の爲に苦しめられ殊に教を聞きて道を修することなく死後再び惡趣に墮するもの。第二は暗より明に入るもので、此世に於ては具さに艱苦を嘗むることありとも幸ひに正法に逢ふて功を積み徳を累ね未來善果を招く類。第三には明より暗に入るものにて、現世にありては尊貴豪富にして榮華を恣にするも、道を求め心を修むるに意なく、來世殃罰うくるに至る。第四は明より明に入るもの、現世に於いて困乏の身に逼るなく壽命亦長久にして、幸に佛説を聞きこれを信受して歡喜踊躍し、常來の證果亦空しからず所謂現當二世の利をうる人でありませぬ。以上四種の區別は慥かに人生の事實であります。されば吾々は今明に在り暗に居るにしても、是非共適切なる道を求めて益明に入らねばなりません。そうしてこの道を教ゆるものは吾々本有の佛性を發揮する佛教より外はありません。

滄海之一粟。哀三吾生之須臾と云つたのはこの空間時間の无限に對して吾等人類の如何に小なるかを歎じたものであります。又智恵について考ふるも人はどれ丈聰明であり、どれ丈學識が具はつても畢竟有限相對であつて、逆も宇宙の事物を知りつくすと云ふようなことは思ひもつかぬことでもあります。僅か人身を研究する生理學においても、胃が凡てのものを消化するにかゝはらず、何故胃それ自らを消化せぬかと云ふ問題は今に解釋が出来ないのであります。かゝる智恵を以て佛の眞理と冥合し玉へる无限の智恵と較べものになりませぬ。又慈悲にしても吾々の情けは只親子兄弟朋友等ほんの僅かの範圍に限り、而もこの範圍の中ですらも等差を生ずるのであります。さるに佛の大慈大悲は三世十方恒河の衆生にゆきわたらぬ限もありませぬ。要するに吾人は凡てに於て有限佛は凡てに於て无限であります。されば衆生が佛になると云ふことは有限の途より无限に至らんとするので、逆も凡夫の力にては出来る氣遣はありませぬ。こゝを以て即ち佛にすがると云ふ大信心が必要となりて参ります。なぜなれば有限のものは其自身では逆も无限にはなれぬ、有限が无限となるにはどうしても无限の力を借りねばならぬ故であります。吾々が大臣たり大將たることを望むならば、其望みは大なるも成し遂げられぬ事はない。されど吾力は十貫目以上を動かす得ざるに二十貫のものを動かさんとするには勢ひ他の力を借らねばなりません。吾人か人以上の佛にならむとするには則ち人以上の力を借らざるべからざるは理の當に然るべきところこれ眞宗に云ふ他力の大道なるものであります。

れど同じ佛教中にもこの佛性を見る方面を異にして或は淫蕩と説き或は眞如と説き或は法性と説くなど様々に其修行の方法も夫々違ひがあります。淨土眞宗に於てはこの佛性を如何にみるかと云ふに、見眞大師は和讃の上に、

信心よろこぶその人を 如來とひとしとき給ふ

大信心は佛性なり 佛性すなはち如來なり

と示されました。即ち他力易行の宗義に於ては大信心を以てたゞちに佛性とも、大信心を得たる人を以て如來とひとしといたします。信心とは即ち一切自分のはからひをすて、唯一すぢに佛にすがるので、つまりは煩惱妄想をうちらはらふて佛の御光りを仰ぐことであります。已に窓をひらきて外の光りを通ずれば、内の光りと外の光りと區別のあらう筈はない。如來の御心は即ち衆生の心であります。又大海の水も茶碗の水も水に區別なきがごとく、如來の大覺が衆生の上にあらはるれば、これを如來とひとしと申しても差支はありません。

扱て信心とは我身を佛にまかすと云ふことですが、一体佛とはどう言ふ方かと申すに、佛と人とを比べますれば、佛は空間的にも時間的にも智恵の上からも慈悲の上からもかぎりのない方と申さねばなりません。これに反して人間はこれらの凡てが皆かぎりがあります。即ち佛は遍一切處とも云ひ又盡十方无碍光如來とも名けて宇宙に遍滿し玉ふのであります。然るに吾等は僅かに六尺たらずの體軀を以てこの宇宙のほんの一部を占めております。又佛は無量壽と申して命にかぎりがありませぬ。然るにわれらはやう／＼五十年か六十年を一生として此世に出て來たのです。蘇東坡が赤壁の賦に渺

扱佛と衆生との關係を述べたのに最も手近きは親子の關係である。凡そ世に何が至誠であると云つても親子の愛ほど至誠なものはありません。朋友や師匠に對して親切を盡すと云ふても、一點の他に求むるなき赤心を以て盡すと云ふことは殆ど六ヶしい。これに反して母親がまだ頑是なき幼兒を膝にかゝへて乳房をくわへしむるの如きは、そこはたしかに一點の私がない。眞に純粹潔白な情愛があらはれるのであります。私かなぜこれを申すかと云ふに、今こゝに二人の息子がありと假定して、其一人は頗る孝行もので他人からも譽めらるゝが、弟は全く放蕩に身を持ちくずし、事によれば親の首に繩をもかけまじき不埒者なりとしますれば、このときの親心に兄のみが可愛くて、弟は憎いてありませぬか。成程善を愛し惡を憎むは最も公平なる考へてはありまするが、それは他人が見た上の事で、親の心には決してかゝる偏頗のあるを許しませぬ。自分の子が惡事をはたらけば猶更に可愛く、どうかはやく本心にかへらしたさの切なるに思ひより。鈍る手先で折檻もすれば、涙をのみて勘當もすれば其内心憎いなどは夢にも思ふものはありません。されどこれは親が子に對する情合で、これあるからと云ふて小供が益々惡事を働くようではまだその小供には親の情が分つたとは申されぬ。されど一度は悔ひ改むるにちがひない。これ親の至情が子の心を啓發し、親と子の二つの心が全く一致となりし味である。佛と衆生との關係も少しもこれに異ならむのであります。凡そ吾々が如何に立派に立振舞てれるようでも、中夜ひそかに胸に手をあて、一日の行爲を反省したとき果して一點も天地に

耻ぢざる行が出来たか。人前はそこ／＼に繕へども心の内では憎い思ひしいと思ひしことはなかりしや。かく數へ來ればわれ／＼は終日一點の善行をもなしたとはみへぬ。悉くみな貪瞋恚三毒の煩惱に外ならず。思へば立ちても居てもいらぬ心地になるのであります。こう云へば厭世的のようですがこれが人間の事實だから仕方があります。さればわれ／＼は日頃かくも恐ろしき罪過を犯し乍ら。これを世間あたりまへの如く考へ、一向に悔ゆる心のおこりませぬものを、佛は殊に可愛と思召し、様々に折檻をもし教訓をも垂れて、一時も早く本具の佛性にたちかへらしめんとし玉ふのであります。故に佛の慈悲心、水のひくきにつくがごとく、罪が深ければ深い丈益、その方にしみわたるのである。耶蘇教で博愛と申しましても。其神の心に叶はざるものは救はぬとあるが偏頗の愛である。佛の慈悲は悪人をも愛し玉ふと云ふ絶対の愛である。歎異鈔に善人なほ往生す、況や悪人をやとあるはこの佛の大悲を示されたものがあります。悪人が往生しうるからとてそれをよいことにして益、悪事を働くのはまた眞に佛の慈悲を我物にしたとは申されぬ。かゝるしづとさ心の底にも一點佛の誠がいたゞけて見れば、今迄大悲の光にそむきて悪業煩惱に身を浮きやつした事の如何にも恐しく、大悲の光明を仰ぎ求哀懺悔の境に至るは自然の勢であります。丁度窓は開けて一道の光明かさしくれば、今迄室の汚さに氣が付き。いそぎ起きて戸をひらき窓を放ちて。出來得る限り掃除に手を盡くすと全じてあります。かくて一步は一步丈佛の光りか我心に充ち滿ち、煩惱悪業は自ら消滅し遂にはうち光りも外の

光も全しものとなる。是れを佛心と凡心と一体になるとも云ひ又は機法一体とも名けるのであります。かくて心は常に歡喜にみちなすべし善は自ら來り去るべき惡は自ら去りて、求めずして完全の人格に達し、圓滿の生活を遂げうることを教ゆるが、佛敎の眼目、ことにわれらに最も適切なるは淨土眞宗他力易行の法門であります。

信仰問題

續 靜觀錄

涅槃の極果、園林の遊戯

近角 常觀

「淨土眞宗の勸化は平生業成の信の一念にて往生の得否は定まるものなり、是皆彌陀他力本願の強縁にもよらざる」と心得べきなり」と云へる善知識の御教訓は我が父が最後の際に至るまでの信仰の鑑であつた、そして私に身を以て其味をしらして下さつた、特に平生業成の意味が分つた、全体父は持病の爲めに深き昏睡に陥るゝ事が多かつた故、人生上の事は大抵皆違つてあつたが、其間に於て信心上のことだけ益々確實であつた、日暮から夜に入るに従て星の光の明らかなることが分つて來る様に、信仰の有様は少しも平生と異なることはなけれども身体も不自由になり、口には嘔語ばかりを云ひ、精神上も間違がちになるに従て信仰の間違なきこと

がひとさばよく目立つて來た、最も驚いたのは身體に随分甚しい苦痛があつたにも拘はらず、身體の苦痛と心の安慰とが別々なつてあつた、嘔語と讀經とは出てくる所が別な様な氣持がした、動もすれば平生業成とは平素に手廻はしを爲て置くことで、平素に役濟みであるから死際には信心が消えて仕舞つてもよいのであると誤解して居るものがある、こんな信心ならば仕入物の様な信心じゃ、金剛堅固の白道は、いかにも人生の水火の爲めに蔽はるゝことはありても、心の底には終始變りなく、未まで通りて遂に西にの岸まで達して居るのである、一分／＼病苦は増す、一息／＼體力は衰へる、して信心のことは確然とした儘で、少しも變らず、遂に寂靜無爲の境に入るのである、涅槃の城には信を以て能入とすると言ふ言は初めて身に浸みて頂けた、煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を得ればすなはちの時に大乘、正乘、聚のかずに入るなり、正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度にいたる」と云へるならかなる連續がよく味へた、臨終と云ふ時に別段際だちて氣をとり直す必要はない、平生業成の一念の信は上一生の間繼續して自分では計らはざれど、所謂自然の強縁にひかれて人生の日暮が來ると同時に滅度涅槃の星が輝きてくるのがある、

人の死と云ふ有様を見るときは滅度とか寂滅とか云へる言はいかにも適切である、されど其滅なるものは、絶滅するの意味でなくて、却て永久自由の境に入り、所謂諸根悦豫の樂しき域に遊ぶのであることは此度親しく實驗したる事實によりていかにもよく分つた、實に是れ常樂の妙境であつて、佛

が涅槃に入り玉ふとき、悲しめる弟子方に對して如來は常住にして變易あることなしと教へ玉ひたる、靈域が歴々として見ゆる心地がした、かならず滅度にいたるは常樂なり、常樂はすなはち畢竟寂滅なり、寂滅はすなはち是れ無上涅槃なり、無上涅槃はすなはち無爲法身なり、無爲法身はすなはちこれ實相なり、實相はすなはち法性なり、法性はすなはちこれ眞如なり、眞如はすなはちこれ一如なり、しかれば彌陀如來は如より來生して報應化種々の身を示現し玉ふ」と云ふ繰返しの御言が、一々活きて味ふことが出來る様になつた。

淨土論に描かれてある淨土莊嚴の有様は此度こそ目に見る様に頂くことか出來る様になつた、正覺阿彌陀法王の善き力によりて住持せられたる寂靜無爲の淨土の大なる御親の下に如來淨華衆たる眷屬莊嚴の方々が正覺の華より化生し玉ふ様子が、見ゆる心地がする、我父の如きも今や此莊嚴の仲間入りをして善友相見へて、極なく喜んで居玉ふかと思ふと、實に心の中が淋しき中にも非常な満足である、其淨土に生れらるゝや所謂無生の生て目を醒めて見れば、昔しながらの悟の限なき世界であつたことを味ふて居らるゝことであらう、殊に五功徳門の譬喩などは、たしかに淨土穢土の別を出入した經驗のある人でなければ逆も説くことの出來ぬ境たることが分つた。

私は二十年來他に遊んで居りましたが、今になりては毎年必ず國に歸省した時の感じを想ひ起さるを得ない、瀛車が生國の境に入る、山水は皆舊知已である、行き過ぐる村々まで幼少の時に遊びた歴史中のものである、かく一歩々々漸次

故郷に近く、遙かに我村が見える、我家の松が見へる、次に屋根が見へる、近門の味はこゝじや人生にて法をきゝて一歩々々浄土に近づくも、かくの如きである、かく近づき来れば既に田にある農夫、道に遊べる小供までが、歸りて来たまひたと迎ひに来る何時の間にやら我は故郷の人たる大衆衆門正定聚の仲間入りをする、かくなればモッ歸つたも同様、足の進むに隨ひ自然に我家の門まで来る、さていよいよ我家の關を過ぎて、待ちかねたまへる父母の膝下に唯今歸りて参りましたと頭をさげ、頭を上げれば兄弟は側に在り、舊知已も集つて居る、一家團圓やれ／＼と心を安らかにし、氣ををちつけて、いつも佛祖の冥助に感泣したことであつたが今は吾父も其如く蓮華藏世界に入りて、眞如法性の身を證りて待ち兼ね玉へる本師法王に見え、眷屬莊嚴の中に加はりて修行安心の宅に安住し玉へる宅門の味は、二十年來、我か度々此生に於て父上に歸省した味と同様ならむと思へばたしかに自分も半分だけは父上に伴ひて其境にある心持がする、偕夫から座敷へ通る、母上の用意し玉へる御馳走、誰某が呉れた菓物、歸るまでと貯へて下さつた珍物など、旅の話と、故郷の話と、語を交へつゝ、味ふ有様は、是ぞたしかに修行所居の屋寓に入りて佛法の味を愛樂し、禪三昧を食として法味樂に満足する屋門の有様である、かく満腹し終れば、庭木やら花園の間でも散歩でもしようかと父子相携へ、母も妹も弟も其々に徘徊する有様こそ實に蘭林遊戯地門の眞趣味である。

蘭林遊戯地門と云ふは如何にも適切なる譬喩である、論に曰く大慈悲を以て一切苦惱の衆生を觀察して、應化の身を示

し、生死の蘭、煩惱の林の中に廻入して、神通に遊戯して教化地に至る本願力の回向を以ての故に之を出第五門と名くと、誰も何氣なく讀みつゝある文なれども實に深き趣のある教である、應化身を示現することは恰も法華經の普門品に説ける三十三身の如しと曇鸞大師は註せられた、又願文には普賢の徳を終習せんと誓てある普賢行願讚なる經文の意義を味ふに恰も彌陀の願意と同様である、抑々普賢行願讚は文殊師利發願經と同本異譯にして其意味は左の如くである、曰く身口意の三業を清淨にして十方の諸佛如来を供養し、三世の菩薩と共にあらゆる衆生海を濟度し、殊に文殊師利は智慧を以て普賢の行願と相伴ひて、多くの佛子を誘ひ、命終の時無量壽佛の宮に生じて、親しく阿彌陀佛に見へ奉らむとの意味である、かく考へ来らば諸經中にある諸佛法菩薩は我々を引接する爲めの方便である、してみれば吾々人生なるものは如何なる所に如何なる佛の示現があるやら分からぬ次第である、親鸞聖人が聖徳太子の上に觀世音の慈悲を仰ぎ、法然上人を以て勢至菩薩の智慧の化現と見玉ひし如きは、たしかに之が事實的證明である、闇の夜に鳴かぬ鳥の聲さけば、父かと思ふ母かと思ふ、吾々一生の間に生れかはり死にかはり、佛が私を救ひ玉ふことの深き事は到底測るべからざることである、亡くなられた親が我を導かんとて樂しき浄土に安んぜずして、再び穢國に還來し玉ふことと思へば、親の慈悲の極なきに感泣すると同時に、もと／＼如來の御親が我親を出迎へ玉ひしのみならず、蘭林遊戯地門の衆生濟度の徳まで授け玉ひたる周到なる根本的大慈悲に渴仰する次第である。

此に至りて親鸞聖人が此蘭林遊戯地門に重きを置き玉ひて、佛陀が我々の上に下し玉ふ救濟の一半であると示し玉ひたるは中々深き味あることである、文類開卷に「謹んで浄土眞宗を案するに二種の回向あり、一には往相二には還相、往相の回向につきて眞宗の教行信證あり」と宣へるをみても分かる、私の如き從來還相回向なるものを左程重大なることと思はず、有躰に告白するに眞實證の附物位に考へて居つたが、是は大なる誤であつた、親鸞聖人の如きは晩年になるに従て此邊に重きを置き玉ひしものと見へて、特に出入二門備なるものを作りて、浄土に入ること、穢土に出でること、を對等に並べて何れも佛陀の回向なりと喜び玉ひた、私の如き從來前半世に於ては父が浄土に往生せらるゝ始終即ち平生業成の信心から遂に涅槃の妙果に達せらるゝ最後までが信仰の鑑であつたが、今ではもはや親しみ接することが出来ぬゆゑに唯々穢土に還來して普賢の徳を修し玉ふことを後半生の理想とするより外はない、和讃に「觀音勢至もろとも、慈光世界を照耀し、有縁を度してしばらくも、休息あることなかりけり、安樂浄土にいたるひと、五濁惡世にかへりては、釋迦牟尼佛のごとくにて、利益衆生はさほまなし」とあるは今人は人ごとならず、よく我身の上に蒙る慈光なりと喜に堪へぬ次第である。親鸞聖人が「我二菩薩の引導に順して如來の本願を弘むるに在り」と宣へる感謝はよく／＼身にこたへて感涙に堪へぬ、幸に宿縁深くしてかく行信に遇ひ奉りたる已上はモウ此世の望は此大御親の慈悲を一人にても傳へる常行大悲の徳に従て生活するより外はない、かく生活せば我一人居ら

ば二人、二人居らば三人と必ず我父も影の如くに我々の身に添ひ玉ふことは疑はれぬ次第である、されど此世に居る間は凡夫は飽まで凡夫である、思ひ存分に御慈悲を傳へるなどは中々思ひよらぬことである、寧ろ、我等も遂には正覺華中に化生して、本師法王の大御親と眷屬莊嚴中の我が親に遇ひ奉り、再び手を携へ親しく此世界の蘭林に遊戯することと和歌の浦の片雄波のよせかけ／＼返らむが如く心ゆくばかりに衆生濟度をして下さることと思へば、唯々佛意の極なきに仰嘆し奉るの外はない。

同一鹹味

信仰は實感也

百目木 劍 虹

信仰は強ゆべきものではない。若し強いられて餘義なく信仰の門に入らねばならぬとせば、下戸が酒を強ゆられて迷惑を感じるよりも、尙多くの苦痛を感じるであらふ。強ゆられ信仰の鍵を握ることが出来るものとせば、信仰なるものはこれほど易きものはない。腕を斷つる要もなく、苦行を積むにも及ばぬ事である。けれども信仰を求むる決して易きものではない、且つ強ゆべき性質のものではない。全体信仰は内心に於ける實感の呼び聲也。たゞそれ實感なり。其聲を極めて切である。而も胸が張り裂くやうである。實感の伴はざる

信仰は強ゆられたる信仰なり、偽りの信仰なり、空砲なり、實感ではない。斯の如きは根底なき信仰である。これもとり信仰と名くべきものではない。根底なき信仰は絶えず動搖し、絶えず變化するのである。風雨の難に遇ふては忽ち破壊し去らるゝは無論の事である。たとへいぶせき家を造るにもせよ、礎を撰ぶは其根底を持ち來さむが爲めである。況して永遠の生命たる信仰を得るには、確乎不動の地盤に立つことを要するは今改めて云ふに及ばぬ。

實感生じ來りて始めて活きたる信仰を呼び、温たかき慈悲の懷に眠り、安らかに大靈の裡に生息し得らるゝのである。

實感溢れ來れば、其日々の新聞紙を讀む中にも悲しき記事に觸れては、思はず涙を漉くことあるは全く實感の伴ふが爲めである。詩人が自然の美に憧憬して富麗なる才藻の溢れ出るは正しく實感の生じ來ればである。實感生じ來りて始めて天地を動し、鬼神を泣かしむる大文學が現はるゝのである。

今、信仰も亦此通りである。強ゆられて信仰の得ざるは實感の動かざればである。實感一だひ發し來らば強ゆざれども凡ての障壁を撤し、敵壘を陥れ、猛然として向上の一路に進み、さらに究極の點にいたらねば止まむのである。嚴寒に鎖されたる櫻は一だひ陽氣の發動に遇ふては艶麗の花は咲かずに居られぬ。吾等も春風の實感に遇ふては信仰の美しくしき實を結ばずに居られぬ。さらば如何にして實感を呼び起すべ

教に入る所以である。宗教の天地は悠久なり、空は高し、地は廣し、往くとして何物をも包容せられざるはない。罪惡、無常、樂天、何れよりするも些の妨くる處はない。貧者の境に處せざるものは其味を解せざるが如く、宗教に指を染めざるものは宗教の妙味を知らざるのである。宗教は無味乾燥臘の如しと思ふものもあらむ。然れども一たび之を口にすると忘れむとして忘れ得らるゝものではない。其味や吾に取りては水の如きものである。水の味は何れにあるか、吾等は容易に答ふることは出來えない、宗教の妙何れにあるか、得て説くべからざるものである。多くの人は宗教を味はずして、手を觸るゝさへ恐るゝものがある、これいまだ實感のいたらざればである。所謂機縁醇熟せざるものか、吾等は悉く佛性ありと云ふ。應て宿縁の開發せざる、あらば花は自ら開くであらふ。實は自ら結ぶであらふ。宿縁の開發、畢竟實感に觸るゝり外ならぬ。

勿論信仰は強ゆべくもあらず、されど信仰の冥祐を説き、大靈の偉力を語り、佛陀の慈悲を談ず。亦是れ實感を動す道たるを失はない、宗教に入らざる人稍もすれば強ゆるなりと云ふ。誤りである。たとへ徐に大悲の深さを語りて靈光を發揮し之を示すにありのみ。強ゆるではない。吾は重ねていふ、宗教の妙味は得て説くべからず、たとへ實感に訪ふるのみである、と。

吾は今にして思ふ。曾て人の信仰を疑ひし時ありき。己れ先づ得ずして人を疑ひ、且つ嘲りて疑信者と呼ぶことの如何にも人間の我儘千萬なるを思ひ起しぬ。今と雖、吾は堅き信

きかとの問題は當然に生じ來るのである。實感是他より強ゆるものではない。全く自己心の經驗である。詳言すれば何物か心奥の琴線に觸るゝと共に自覺の地盤に立つことである。自覺の域に進まむか、懺悔の泉は沸々として溢るゝのである。懺悔は洵に宗教に入るの門戸にして、又信仰を握るべき鍵である。眞實自己の内心より悔ひ改むるの聲にあらざれば、それは偽りの懺悔にして罪深かき業である。吾等は往々にして自身の臭きを忘れて居る。却て他より注意を受くることあるも、悔ひ改めずして蓋を掩はんとするは吾等の本性である。吾等の本性は如何にも卒直でない、東を唱ふるものあれば、西と呼び、是と呼べば非と唱へ、凡てに於て反抗心の起らぬ事はない、惡事を注意さるゝは喜ぶべき善のものが却て怨とする事あり。洵に淺ましき心である、かく淺ましき心、卑しき心、低き心の時々刻々間斷なく小さき胸に炎えつゝある時、つくゞ人生を厭ひ、世の無常をはかなみ、そも吾等の生や此世に何等の價値あるべき、死の趣向する所を知らずと雖、死や如何に麗はしきかを想到し、嗚呼紛々たり此の生、擾々たり此の世、雨は蕭々として點滴靜に軒を繞り、轉た人生の效果なきを悲む……此實感生じ來りて始めて悠々たる絶對の天地に入り、信仰の甘露に露ひ、身は蘇生し來りてこゝに人生の眞意義を解決し、信仰の關門は打ち開かるゝのである。

而して實感の生じ來る悲慘の境に於てするものあり、或は然らざるものあり、もと一を以て律すべきではない。これ罪惡觀を以て宗教に入り、無常觀を以て入り、樂天觀を以て宗教を握り得たとは云へぬ、されども幾分たりとも泌みじみと嬉しく大悲の光を感じるやうになつたのは、全く人の信仰を疑ひし時、先づ自己の足元に氣付きし御蔭げである。謂はば逆縁が順縁となつたのである。若き人の類に念佛を唱ふるを見て心に障はる時もあつたが、今は左程に感ぜぬ。思へば如何なる時、如何なる所、如何なる機に於て信仰の力を握るとも限らぬ。散る花、落つる葉を見て悟つた人もある。雲の脚の早く、青葉の綠滴たるを看てもたゞ事ならずと感ずる事もある。若し天地間の變動に際せば、吾等は之より偉大なる教訓を與へらるゝであらふ。否、佛天は吾等に教訓を示すのである。大事、小事一として心琴に觸れ實感を呼び來さざる事はない。言ふことの多くして行ふことの尠なき、顧みて自ら慚愧の念に耐えぬ次第である。

無題錄

鈴木卓苗

如來を知らず世を過す人の寂しさこそあはれなれ、かれ日に動物の群を見るもそが一層善き者に何の縁あるを見ず、馬を見、牛を見、鳥を見るも彼我と共に生命久しからじと思ふのみ、身は既に家なく、父なく、望なき捨てられたるカインの如く如來の造物に觸るゝも我足音の外何の響をも聞く力なし、人が情けを懸け子をはぐくみ、客を好み、約束を遂げ、

眞意をもてかにかくと働けるを見るも何の感あらむや、彼の身に取りては世には如來の造物てふもの、あることなく潑刺たる動物も幽靈の如くに見えて何の價値もなし、天と云ひ地と云ふも其美を認むるを得ず、「大なる」と云ひ、「崇ふ」と云ふも意味のなき詞となる、かくて一切の思想は尤も淺膚にして何等の深味なきに至るべし。……

今の時に於てなほ、宗教の職能を是非するものあるはむしろ怪むべしとすべきも亦止むを得ざらむか、徒に自力他力の名目に拘はり、小乗大乘の別ちに迷ふことをやめて直線的に宗教の堂奥に入り來るべし、たとへば講堂の椅子によりて寺院の感化を論ずるよりは、一日歩を移して法堂の聽衆となるに加くはなからむ、上に出したるは南米の自由郷コンコルドの寒村に遣はされたる如來の代官エマーソンの言へる所なり、天日のあたゝかき下に住ひつゝもなほ「我足音の外何の響をも聞くの力なき」吾等はこれをよみてたゞ驚歎の情に堪へざるあるのみ。

宗教的生活とは友愛的生活をいふなり、友愛的とは同情の生活なり、好意の生活なり。已れ一藝をよくするの故を以て他に誇るの情なきは友愛なり、友のあやまちあるを見ては之を責むるの暇なく、自らの手を垂れてそれを正しきに引きあぐるは同情なり、自なく他なく、他あり自あり、自他渾一のこゝろに満たさるゝ生活はこれ好意の生活にあらずや、あゝかゝる生活そこに一の嫉妬なく争闘なく希望と感奮とを以てみたまるべきことを想は、何ぞ

祈禱とは最高の見地より人生の事實を觀せしなり、心霊が如來に酔ふて爲せる悦の叫なり、如來の靈が自己の事業を讚美する宣言なり、
 人若し如來と一ならば別に求むる所あらざるべく、
 凡百の行爲悉く皆祈禱なるの理を悟らむ、
 田間に耘らむとして首を垂るゝ農夫の祈禱、
 海の上に艦を推さんとして俯する舟人の祈禱、
 彼等の求むる所こそ少けれ、
 實に天然を通じて響く眞正の祈禱ならずや。

能禮所禮性空寂
 自身他身體無二
 願共衆生得解脱
 發無上意歸眞際
 前はこれエマーソンの自依論に出て、後は禪家の旦夕禪拜の時に口すさむ所の偈文なり、讀む者むしろ意外の感なからむや。

われ一日庭球の戲を望みとして家を出てしに途すがらいつになき心のせわしさを覺えてわが足など遅々として進まざるやをかこちぬ、五里三里にわたる旅路にさへ未だ嘗てかくの如く足の進み難さを覺えざりしにまことにいふかじきことかなと思ひけるが、こはある一の尊き自覺に導かれるゝあるなりき。

速かに來つて宗教の門を叩かざる、宗教的生活は詩の生活なり。
 カールライルは詩を説くに哲學を以てし、エマーソンは哲學を詩もてあらはしたりときけりき。
 吾往年大内居士にきけり、佛教に於ける祈禱の意義に三あり、曰く、懺悔、希望、感謝(祝福)

至心にして自ら悔ゆるは、いたむにあらず、詩人の筆を染めて心のあとを畫くが如し、音樂者が心しづかに笛をとり心の音を調ふるが如きなり、されば人にして懺悔なくんば世に天日を欠くに似たらむ、夜は長へにその暗を遣うして光と明とは地を拂ふて去りぬべく、改惡進善の道全く閉ざされむ。曉天の望みは先づ夜の安眠にかゝるが如く希望は恰も登天の梯子の如きか、人生は如來の殿堂にとほれる燈火をのぞみて崢嶸たる行路を辿るなり、やがて釋迦至尊と共にその聖坐を頌ち得べし、
 感謝はこれ人か如來の慈容に酔ふて叫べる聲なり、叫びありて音あり、音ありて反響あり、人は反響により自分の聲を意識す、人生に感謝あり初めて如來の感容を知ることを得む、我推するに、祈禱は自力にして他力の宗門之れなしと言ふべからず、如來の大願に驚喜して只管稱名念佛にくるゝはこれ感謝なり、しからは眞宗に祈禱なく禪宗にこれありと言ふべからざる、祈禱なくんば宗教なし、宗教ありて祈禱なきはあらずかし。

當時わが胸の中には早や已に運動場の樂しげなる光景を浮べ、輕やかに飛び來る球を受けとばし受け落しなどするに心くれてひたすら現ならぬ夢幻境に逍遙しつるなり、さればこそわれは自らの足の進みの遅々たるを覺えてその境の得がたきを感じたるなれ、言ひ換ゆればわが望みの力にうながされて身は空蟬の殻となり足は浮草の根なきものとなりけるなり、日頃散歩を目的として出立てるや少しも足の歩みだに覺えず、ましてその遅々たるをや、この時に於ては「歩むこと」夫自身に望みつながら身を正し眼を見はり、耳を虚にし手をふり足を伸ばして歩むことに目的を存するものから、一步を安らかに運び得てはそこに一步の慰安を感じ、十歩に躓くことなくしてそこに十歩の勝利を喜ぶが如く、眼にうつくしきを見ては喜び、耳に醜き音をきくは悪魔のさゝやきを怖れつゝ、しみつゝ、わが足の上下するにつれて身の前途に運ばるゝを得ずれば、足つかれ、る倦む頃は已に既に散策の目的を達し得たるの時なるを以て勞れに悔なくむしろ成効に喜びを感じて再び机に向ふことを得るなり、さればさきの時には戲球の望みにあくかれてうつし身の足を浮かしめ、後の時には望みの糸をたぐりつゝ、一步は一步の如く地の上に足を踏みしむ、さればさきにはもたえあれど後には喜びあるなり、之を比するに道教と宗教との如きか、「望み」のみを人生に供するは人をして幽靈とならしむるものなり、されば宗教にして若し教義のうつくしさに酔ふてその實驗的歴史を閉却せんにまことにこれ人生を毒するものとなるべきなり。

……

南村閑話

一 記者

◎馬にも駿馬あり、驚馬ありと同じく、僧にも色々の種類ありと見えて、十輪經の中には四種の僧説を出してある、其中に活命の爲めに出家すと云ふ事がある。昔も今も人情には變りがないと見えて、活命の爲に出家の僧もあつたやうだ。が、然し今の僧侶は大抵活命の爲め働くものが多いやうぢや。

◎人には威儀と云ふものが必要である。大乘の法門と雖、凡ての事を無視する譯にゆかぬと見えて、傳教大師は鉄鉢を抛つて木鉢を持せよと論じてある。即ち鉄鉢を持するものは小乗の徒に限るゆゑ、苟も大乘の法服を着るものは、威儀を繕ふ爲めに木鉢を持せねばならぬと云ふたのである。これが佛教の眞精神であらふ。

◎維新後には妙な事があるよ。一体今の管長と云ふものは宗派に名けたものと思ふては大間違さ。時の政府は神佛二道の教導職取締として管長の職を許したもので、決して宗派に許したのではない。而して其教導職と云ふものは專一に己が宗旨を宣布するものが出来なかつた。僅かに三條の教則に依りて宗旨交説不苦と云はれた位で、教導職と云ふものは神官とも限らず、僧とも限らず實に奇妙なものであつて。そして僧侶は一般の職務と心得よと命ぜられ、前に國家の厄介物にせられたものである。當時私が一体今の寺院を打ち壊し、僧侶を廢する意見であるかと當路者に向て詰問した位であつた。

れやならぬ。

◎却到長安買竹看、と云ふ古人の句があるが、菜の花や、菜種の花よりは、なか／＼興味がある。

◎椿の花一枝上げませう。見事に咲いてあります。オ、それ一輪散りました。むかしの人が飛花落葉を見て悟りたと云ふ事であるが、これの事ですよ、合點ゆきましたか。思はず呵々大笑。

◎人には誰でも盗心がある、されど之を爲し能はざる所以のものは盗才なき爲である。

◎人には欠點を見るものと、長所を見るものとの二通りあるが、詩人磨瀨淡窓の如きは後者に屬し、松川北渚の如きは前者に屬すと云ふものであらふ。私は淡窓の詩風はあまり感服せぬが、さりながら迎も他の摸倣し得ざる所がある。私の師匠ですか、別にあるませぬが、私は中島棕蔭の詩は好きです、北渚と棕蔭との間に面白い話があるよ。棕蔭の登岳の詩を誰れか知らむが、北渚に見せたものがあつた。北渚言下に評して曰く流石は京都の詩人だ、紅がうまくさしてあると。其詩は忘れたが、たしか十年相別不忘得。清夢依稀枕上山。の句であつたやうである。紅をさしたと批評されたのは清夢の二字であつた。北渚の言葉に清夢の二字はどうも分らむぢやないか、古人の句に舟船明日是長安とある。敢て舟船と云はずとも片舟でも孤舟でもよさそうなのであるが、矢張かゝる時は舟船に限るやうである。と云はれた事を間接にきいた事があつたが、北渚は如何にも欠點を見ることが巧で且つ腹を抉ぐるやうな云ひ方である。其後私が棕蔭の處へ参りて掛物を

◎今ではどの宗派も管長の職に改めたが、むかしは天台宗では座主、東寺では長者、三井寺では長吏、眞宗では門跡と稱したものである。むかしは各々其格式は違ふたものであつた。

◎日本が古來より經典に富み、珍籍の多い事は決して偶然の事ではない。東大寺の莊辨の書いたものに、後白河帝の時、態々使僧を宋の國に派遣して珍籍を求めさせたと云ふてある、交通不便の時にありて此事あるに至りては洵に敬服に堪えぬ。

◎上の好む所、下之を尙ぶと云ふ事は能くも日本國民の性格を穿つたものである。

◎木綿の羽織に木綿の着物もよいが、絹布團に寝るやうては、あまり感心せぬわい。

◎介石が云ふたやうに奢の字は者と云ふ字の上に大の字をかくが、者より大なるが故に奢になるのである。たとへば百圓の收入あるものが二百圓使ふやうては奢りである。しかし百圓の人が五十圓使ふたとて決して奢りとは云へぬ。要するに皆それ／＼分に應じて奢りに流れぬやうにするが肝心ぢや。華族様が華族らしく品位を保つのが至當である。華族とも云はれ多くの人に尊敬を拂はるゝ方が綿服を着るのも悪いではないが、あまり物好てはあるまいか。

◎俱舍學者で有名な梅痴と云ふ人の句に
客居久慣熟於家。半在京華半浪花。苦砌春融連夜雨。
雖非我土又栽花。

執着なく、凝滞せざる所味ふべきである。誰でもこうてなけ

見た時、前の清夢の二字がちゃんと入夢と訂正されてあつた。北渚の言に注意したのかどうかは知らむが、兎に角棕蔭の詩は晩年になりて大熟されたものであつた。此事は一の詩話として傳ふべき事である。

◎穴戸瓊と云ふ人は長州のもので、まことに面白い人物である。盛に尊王攘夷を唱へたものである。後ち人ありて其故を問ふ。答へて曰く。むかし再は酒を悪て善言をよみす。周公丹は禮を制作して酒を用ゐる。孔子は唯酒量なし、亂に及ばずと云れたたではないか。禹、稷、顔子、地をかへば皆然らざるものはない。余が尊王攘夷の説も亦時によるのみと云ひ訖りて呵々一笑せりと。禹、稷、顔子、地をかへば皆然らむと云はれしは洵に興味ある言葉である。

毎月教壇

佛教之眞髓

近角 常觀講

第二章 佛とは何ぞや

吾人は是より短刀直人佛教の眞髓を攫むべく試みやうと思ふ、抑も佛教の何たるかを知らむとするには、至極單純なる一箇の問題を解決すればよいのである。即ち佛とは何んであるかと云へる問題である。こは當然なる寧ろ平凡なる問であ

るが如く見ゆれども、頗る重要な着眼點である。全体佛教が佛教たるの特徴を保ちて基督教でもなくマホメット教でもなく特に佛教と稱する已上は佛の佛たる熱が他の教と異なつてあるからである。尙ほ詳しく謂へば佛陀といへる事が眞實によく解かつたならば則ち佛教が解つたのである。故に佛陀は何ぞやといへる問題を解決すれば佛教の佛教たる特徴を知ることが出来る。而して此の問題はかく外の宗教に對して佛教の特徴を示すのみならず、亦佛教内部に於ける諸の異りたる見解の由つて来る燒點である。即ち如何なるものが佛陀であるかといへる疑問に對する見解の異同によつて佛教其物に對する見解に異同を生じ來るのである。斯の如く佛とは何ぞやといへる一疑問は他宗教に對しては區別の旗印となり、内に對しては分岐の燒點となる要である。故に若し此の問題に對して適切なる解決を得るならば佛教の特徴を發揮して諸の見解を融和すること出来る筈であつて且つ是こそ佛教の眞髓を窺ひ出すべき標的であらねばならぬ。

佛陀は翻譯して覺者といふ實にこの一語は佛の佛たる眞面目である。即ち佛といへる一語に於て有ゆる煩惱を解脱して涅槃の境に達せられたる覺者たる事を現はして居る。佛教とは此の覺者が其の自覺の境を説きて復他の人を導きて同じく大覺の境に導き玉ふ教である。故に佛と云ふは即ち覺りたる方である。倍て其の覺つたる方と云ふは如何なる方であるかと云ふに人生に於ける釋迦佛を始めとしてこの人世已上の佛即ち諸佛如來を名づくるのである。斯の如く佛陀の範圍は廣大にして、各宗教の如何によつて其の名稱は色々になり又

之に達する方法は様々なれども覺者即ち大覺の境に達したる人格といへる點は一つである。是れ實に佛陀の佛陀たる點にして佛教として千古動かすべからざる點である。勿論この覺者を見るに本覺と謂へる點より見ることもあり、始覺と謂へる點より見ることとあれど其の覺者と謂へる點は同一である。かく正面より佛陀を説明したるのみにては其の眞面目を發揮するに適切でなき故、裏面より左の二項に従つて覺者の何たるかを説明しやうと思ふ。

- 第一 佛なる思想は神なる思想と全然別なる事及び佛は大覺の境にして決して宇宙の原理にあらざる事、
- 第二 佛陀大覺の境界に於て其の中心と見るべき點の相違によつて又佛教に對する見解に相違を生ずる事。

先づ第一項より論ずるに現今宗教に對する諸種の研究が行はるゝが爲に、各宗教の思想の間に互に混濁を生ずる弊がある。則ち佛教を研究するに現今の新らしき用語を用ふるは固より妨げなきのみならず寧ろ適當の處置なれども不知不識の間に佛教に存在せざる他の思想を運び入るゝ傾きがある、その著しき一例は佛教の佛と他の宗教例せば基督教の神なる思想と同一であるかの如く考へて居る人もある様である。基督教の神は世界の創造主天地の主宰であるといへる思想が根本である。之に反して佛陀はさきに云ふ如く覺つたる方である。従つて神は徹頭徹尾人間の畏服すべき者にして、人間はたどひ救済を受くるとも決してこの境に達することの出来ぬものである。而るに佛陀は之に反して相對人生の眼より見る時

は無限絶對の大なるものなれども、覺者の力により若くは自覺の力によつて其の境に達し得らるゝものである。是れ佛教と基督教との根本的相違の點にして水際を分ちて區別しうべき標的である。則ち基督教は千古權威的宗教として存在するが其の特徴を發揮する所以にして、佛教は如何程各宗各派に分派するとも皆是れ解脱涅槃の實驗的宗教として人生を擧げて大覺の境に達せしむるが其の理想である。

若し兩教に於る類似の點を擧ぐるに基督教に於て神は愛なりといへる思想と、佛教に於て佛心者大慈悲是なりといへる思想とを持ち來りて相并ぶる時は基督の神も佛の佛も同一の如く見ゆる次第であるが、唯この點が類似して居ればとて二者を同一たるが如く見るは大早計と云はねばならぬ。抑も宗教は人心必需の要求に應じて人類の間に存在するものなれば東西民族を異にし古今時勢を別にするも、苟も人間が人間として同一たる已上は是等異なる宗教の上に共通の點ある事は決して怪しむべきではない。即ち人間の心理的作用が同一たる已上はこの作用に應ずる心理的要求の聲が同一となるは寧ろ當然の事である。神が愛なりといへる思想と佛は慈悲なりといへる思想とが自然に符節を合はすが如くなれるは之が爲である。是れ恐らくは佛教基督教のみが共通たるに止まらずして其の他の宗教にも共通であらう。唯この點が共通なればとて神と佛とを同一たるが如く考ふるは大なる誤りである。私の考ふる所によれば世界宗教の大勢は漸次人生の心情に適切なる實驗的宗教に近づく傾向である。全體基督教の如きは、絶對的權威宗教たる猶太教から一轉して、基督の福

音に至りては愛に重きを置きた、されど羅馬教に於ては猶著しく權威的宗教たる面目を存して居る、一たび宗教改革によりて新教となりてから、大に實驗的となつた、されど權威的たるを免れない、猶自由教會を生ずるに至りて大に社會的、人情的となりた、されど現今歐米人の頭腦に於ける神なる思想には愛也と云ふよりも寧ろ嚴かなる畏るべきものであると云へる考か主となりて居る、其點に至りては我國に於ける多くの基督教徒の神なる思想とは餘程趣が違ふ様な心地がする、私の私見に過ぎないが我國基督教徒の神なる思想は寧ろ佛の思想即慈悲なる方と云ふに近くはあるまいか、或は是れ祖先已來養ひ來りたる佛陀の思想が遺傳して居るのではないかと考へて居る、されど我國のみならず近世に至りては基督教の思想が之に傾きつゝあるは事實である、即ちトルストイの如きに至りては神は愛也と云へる已外に宗教はないのである、かくなれば基督教とは云へど殆ど佛教であると云ひたひ位である、されどトルストイの如きは嚴格なる意味から言へば基督教と云ふはいかゞである、或人が世界の創造についてトルストイの考を尋ねたら、其様なことは宗教の要義ではない、現に佛教には世界の始につきて何も言はぬではないかと答へたとの事である、佛教者の眼より見れば此上もなき友人であるが基督教の立場からはいかゞと思ふことである、寧ろ此事は基督教者に向て其判断を任ずること、しやう、私の考ふる所によれば基督教徒の眼より見れば佛教は淺間しき無神教である、而して佛教徒にしては此無神教なる點は寧ろ特徴として自ら許す所である、又佛教徒の眼より見れば基督教

は常一主宰の神や靈魂を立つる執着の宗旨である、而して基督教徒にしては此神や靈魂が宗教の根本として最も貴ぶ點である、かくの如く各相許して明瞭に水際を立つるを得べき相違の點がある、然るに青年佛教者の言論にして、佛教中唯一の人格的佛陀を宗教的客体として救済を得る宗旨即眞宗の彌陀如來の如きをば、時としては此基督教の神と同一に思ひ敬す弊がある、是は非常なる誤である、夫も慈悲の覺体であると云ふことが神は愛也と云ふ意義と異ならぬと云ふことならば、混濫したのみで未だ佛教の眞義を害せぬも、甚だしきに至りては佛陀を宇宙の主、世界の創造者の如く言ひなして、宇宙意識論を持ち出して神の存在を證明すると同様に佛陀の存在を證明せむとするが如きは、たしかに佛教中に基督教思想の混入したるものと言はねばならぬ、彼のトルストイや我國の基督教徒の神の思想が佛である如く、夫等の人の佛の思想の内容は神であると言はねばならぬ、若し親鸞聖人の言を轉用して極端に言ひ放ては外儀は佛教のすがたにて内心外道を歸せせりと云ふべきである。

然らば佛が神と異なるは如何なる點であるかと云ふに即ち佛は覺者であると云ふ點である、神は根本的に人間とは異りて居るのである、佛は人間の煩惱を解脱して、絶對の智慧を顯現し、慈悲を以て満たされたる覺体である、夫故我等も佛に成ることが出来、又佛になつた御方の同化を蒙ることが出来るのである、基督教で人が神になれると言ふならば非常に神を汚したことである、佛教では佛陀は自分の境に人を引き入るゝが目的であつて、佛陀が經驗したるが如く人を經驗せしめて其境に達せしむるが、又佛陀の慈悲に同化せしむることによりて其境に達せしむるか、何れにしても、人間は又煩惱を解脱して、涅槃を證することが出来るものである、即ち佛陀となれるのが佛教の佛敎たる點である、かく覺者によりて覺者となる點が特徴である、是予が佛敎が徹頭徹尾實驗的宗教であると斷言する所以にして、又佛なる思想か他宗教の神とは根本的に異りて佛敎が他宗教と區別し得べき旗印であると主張する點である。

猶現時最も行はれてある言論にして誤れる思想を運び得べき言語は佛教は汎神敎であるか、一神敎であるかと云ふ問題である、全体此等の問題の意味は佛教の信仰若くは悟の對象は人格的であるか、普遍的眞理であるかと云ふ事が主であるのであるが、夫であるならば汎神敎一神敎と云ふ言語を用ゐるのが誤である、之を用ゐる故に忽ち誤れる思想が混入して宇宙の本體根原は人格的であるか、普遍的であるかと云ふ問題となつてくるのである、既に言ひたるが如く、佛陀は宇宙の本體根原たる神なるものでなきとは明瞭であるが、夫と同じく佛陀は又決して宇宙の本體根原たる普遍的眞理ではない、勿論佛教には眞如とか法性とか言ふことを立つるも、是決して西洋の汎神敎に於て宇宙即神と言ふが如く、宇宙即佛と言ひ得べきものではない、全體佛教を以て何主義と命名し得べき様な一定の哲學的組織の如く考ふるは大なる誤である、吾人は上に詳論する如く、佛教は一神敎と言ふべからざることを主張すると同時に又汎神敎と言ふべからざることを主張する、たとひ世界主宰の人格的一神の存在を説かざる

も、若し世界普遍の實在原理を説くならば唯人格的、非人格の相違こそあれ、佛教の特徴を没却し去るものと言はねばならぬ、私は信々考ふるに眞如とか、法性とか云へる言語は涅槃の眞智を開發したる悟の境界に於ける宇宙の如是の大觀を言ふたるものにして、是れを恰も哲學に於ける宇宙原理と同様に考ふるは大なる誤りである、哲學的原理は智識研究の對象である、眞如や法性は悟入體に達すべき宇宙の大觀にして原理とは言ひ難い況んや眞如や法性は佛陀其物とは言ひ難きものである、全體佛陀と云ふことを何か原理でも知ることの様に考へ、甚しきに至りては原理其物の様に考へるゆへに、汎神論であるか如何と云ふ様になつたのである、勿論佛教に哲學の伴ふことはあるも、其極致に達する時は哲學を超越するものである、禪宗に於て見性することが純粹なる實驗であること眞宗で慈悲に感ずることと純粹の實驗である、眞宗の佛陀が基督教や哲學上の一神敎でなき如く、禪宗の悟は決して、スピノザやヘーゲルの汎神敎の如き普遍的原理を悟るのではない、禪宗の見性の眞實の味は如何と云ふに廓然無聖の大覺の境たるに違ひない、是即ち佛陀即覺者たる一語に於て言ひ盡くされてある、かく、佛なる語は、單に他の宗教に對してのみならず、他の哲學主義に對する區別の旗印となつてある。

次に第二項につき辯ずべし、佛陀の思想は、かく外の敎に對して區別の點となるのみならず、佛教内に於ける諸の異なる見解の分岐點となつて居る、早い所が現今新しく佛教を研究するの學者及信仰問題に注意する青年の間に於て佛教に

對する見解が色々あるが、是等の見解の分岐點を考ふるに皆佛に對する思想の相異なるより來るものである、或者は佛をば普遍なる汎神と見るか如きものあり、或者は佛をば他の印度敎の如く大我と見るか如きものあり、或者は佛を理想の擬人説と見るか如きものあり、或者は天地の妙用と見るか如きものあり、或者は宇宙の大靈と見るか如きものあり、如斯佛其者を見る見解の異同によりて佛教其者に對する見解の異同を生じ來るのである、然るに此問題は現今に始まつたものでなく、古より同一の問題が繰り返へされて居るのである、抑々古來佛教各宗が分派したる所以のものも、畢竟此佛に對する考へようの分岐と見て差支ない、併し古來各宗の分岐と現今に於ける分岐とは大に異なる肝要なる點あることを注意せねばならぬ、古來各宗に於ての佛に對する考の異なるは、現今學者及青年が議論上に於て佛に對する思想を異にするると云へるが如き、冷かなるものにあらずして何れも皆佛を實驗したる實驗の方面が異りてあると云ふ次第である、例せば禪家に於て如何なるか是れ佛と問はれたる時に、曰く、麻三斤、曰く乾子概と、云へる如き即ち吾人本來の面目の上に於て佛其者を見たる見地を強いて奇矯の言を以て言ひ顯はしたるものである、此點に於ては確かに大悟直觀の實驗を言ひ顯はしたるもので、之を以て佛陀に對する觀念とは云ひ難い、又眞宗に於て佛陀とは如何なる方なりやと云へば、こは慈悲の体である、智慧の体である、信々親鸞聖人が六軸の聖敎を作られたる意味を考ふるに敎行信證は信仰的實驗の範疇である、其上に附け加へてある眞佛土、化身土の二巻が頗る意味が深

い、即ち教行信證の信仰的範疇に於て實驗したる實驗の中心たる眞宗なる佛陀は如何なるものであるかと摺み來りて之を明了に書き顯はしたのが即ち眞佛士の巻である、親鸞聖人は佛の眞面目は光明無量壽命無量である、言を換へて云へば無限の光明、無窮の生命である、猶適切に云へば光明である、智慧である、慈悲である、救濟である、之が佛の佛たる點であると云ふ見地である、見地と云ふよりは寧ろ聖人が實驗されたる佛である、他の諸宗の云ふ如く法性の理佛でもなく、又自性唯心の佛でもなく、吾人を救濟し玉ふ慈悲の力であるかく云へば今日の言葉で以て申せば所謂人格的の佛である、されど人格的と云へることを眼あり、鼻あり、手足あり、身量に分限ある佛と思ふならば大なる誤である、如斯佛ならば眞實の佛にあらずして、化佛であると云へる考へてある、故に特に化身土卷なるものを作りて眞實ならざる佛士を皆此中に投げこみたるものである、如斯化佛を中心とする信仰ならばたとへ人格的佛陀を眺むるとも、それは眞實の佛ではないと云ふ考である、故に臨終の時、肉眼に見える來迎佛の如きは化佛にして、眞實の信仰には必ずしもこれあるを期せないとまで稱言せられたるのである、實に親鸞聖人の經驗されたる佛は身量に局限のある佛でなくして、無限の慈悲たる本体である、こゝに一寸信仰問題に心かける人々に注意することは此人格的佛陀を中心として信仰を得むとする人は随分夢でもよいから確かに佛の姿を拜みたいと考へることがないでもないが、これは決して必要の事ではない、身に泌みじみと佛陀の慈悲が受けられたならばこれ即ち心眼眞實の佛陀を見ると

云ふべきものである、眞宗の特色はかく佛陀を實驗したることを中心となつてある、其他此筆法を以て各宗の教理を見るときは、必ずや其祖師たる人の實驗したる佛陀が其中心となつてあるに違ひないと確信する次第である、上來二項に於て裏面より佛陀を説明して一は此佛なる思想によりて基督教の神、哲學の原理と異なることを示し、一は其佛陀の境界を経験したる中心の相違によりて佛教其者に對する見解の異同を示した、故に之より進て吾人は佛教の眞髓を摺み出すには又此佛陀を如何に考へ如何に實驗するかを中心として講義をつゝくるならば、佛教の特色を發揮すると同時に佛教の中心たる核を摺み出すことが出来る、故に此の佛とは何ぞやと云へる問題に答ふる事が以後の講義の進むべき方向である。

風尚餘韻

句 佛

春淋し木蓮の華も散るからに

明治廿七年四月發刊求道紙上載近角常親師先考慈光院示寂辭々行々寫血函眞、予之於先考有面識慨然感泣率爾爲挽

菊池秀言 和南

開卷先讀示寂辭。行々寫血轉堪悲。正直慈愛佛心出。宜乎斯父有斯兒。記曾飛錫游湖畔。涇渭清濁各相持。萍水無踪

十餘載。淨穢一別測無涯。宗主垂訓論終焉。哲士題銘記壽碑。諸根悅豫君歸日。諸根悅豫師逝時。芬陀利萎香馥郁。正覺華生功德池。嗟呼師六十六永入常住國。君齡六六早驗眞實證靈境。

に

し け る

(一) 君はしも

暗深き谷間の奥に
迎るべき道をも知らず
懐きて手む前に
君はしも眞珠の光

矢ふすまのまともに立ちて
身に負へる征矢の数々
抜きあはず遁れてたよる
君はしもはしき隠れ家

戦に敗れてにぐる
緑こき木の下蔭に
力つき憩ひて掬ぶ
君はしも澄き眞清水

あぢきなき石を枕に
はてしなき積の旅路
夢さめて寂しき床に
君はしも撫子の花

醜草の荆刺の冠
脱ぎ捨て、天つ御國に
歸り來と吾を邀ふる
君はしも紫の雲!

(二) 星ぞ君

君を星とし譬ふれば
愛のみ神のうるはしき
涼しき雨の瞳子なす
奇しく光の星ぞ君

朝の香崇きみ園生の
紫匂ふ花に置く
清く妙へなる玉露に
やさしく宿る星ぞ君

鳥翼たゝくとき
老樹しげれる幽林の
厚き青葉の枝の上に
重き光の星ぞ君

夕の虹の影消えて
緑いろ濃き湖の
微に白くちる波に
軽く碎くる星ぞ君

されはみ空のかなたより
流るゝ君に觸れんとき
小さき胸はくれなるの
焰の塊と燃ゆるかな

詩の命

詩人の奥都城とてろ
月皎く照せるかごと
活ける詩の奇しき光ぞ
とこしへに彼を予守る

かくはしき妙へなる詩の
詩人の手に咲き出て、
其墓を清く飾れる
手向花とはににじまし

露の身の露と碎けて
詩人はよし死ぬるとも
命毛に力を置めて
染めたる詩う亡ふる期なき

ははは

活

泉

千とせふるさ、
杉の木かけ、
黙せるいはほ、
青き苔に、
昔を抱いて、
谷深く、
露をさびて、
命を見ゆる。

梢の春、
底深く、
そは何ぞ、
たえんに、
つめたきを、
あはき夕、
落つる花びら、
零落のかけ、
下行く水の、
涙とぞ思ふ、

小さき花びら、
弱しや風に、
くれなるとは、
小女の白き、
血しほわく、
なつかしの、
わかき詩人、
青ざめし、
怨ずる世の、
わかれくして、
命まかする、
そも何ぞ、
頬にふれて、
夢多かりし、
その世はかけか、
涙もて、
その唇に、
歌はあるを、

頭たるは、
千年の聲をのんで、
あゝ大岩の黙々たるは、
その中心の力なり、

さみしき風、
青葉にほそき、
動する人の、
ものいはずとも、
ひやゝけき雨、
聲をのこすとも、
世にそむいて、
常住の命、
くだけんや、
力なり、
その中心の力なり、

ほろびんや、
あゝ力なり、
大岩の黙々たるは、
その中心の力なり、

花無常

白林

花の命のあはたしきを
せめて一日のゑにし契るや
東叡山は空をとよめて
人、花ともにかほひ句へど
いづれ逃れぬ運命を知るや

下界を遙か霞の裡に
靄むるに早き色を偲びて

梵天、帝釋、須彌山頂に
誦んずる是空是色のみ經
いま花そよぐ風と流るや

散らば塵土を梢のほひ
散らぬ間ぞ花、色に嬌れる
木の下道を新妻守りて
誰ぞうれしげに花に微笑む
見すや梢に風はやわたる

散らば塵土を梢のほひ
散らぬ間ぞ花、日に照り榮えて
燃ゆる心の色濃き袴
誰ぞうるはしう花にあくがる
見よ、見よ、乙女、花朧こぼる

醉心地よや、彌生の夢を
梢に張りて花と眺めて
覺めぬ間ぞ夢、醒ろしどろに
醉はんや、若人、狂へ、乙女子
無常の現、人得堪へんや

醉心地よや昔の夢を
梢に織りて花と偲びて
覺めぬ間ぞ夢、眼おぼろに

せめて見惚れよ媼おきなよ翁おきな
無常の現、なれ堪ふべしや

四

木の間がくれを聲麗はしう
知んぬ乙女が節なめらかに
胸のほひを花に遣れるや
花のかほりを戀にしめつゝ
梢にうたふ何の契や

れなじ運命さだめの、色と匂ひて
有情の花の、人と生るや

止め、々々、乙女、聞くに堪へんや
歌うるはしう風にたぐへど
花、音もなう、こぼれ落つるを、

五

さても可愛こゝろ兒、頬もふくらに
眼まなこあどなう梢見入れる
行け、兒よ、母の彼方に呼ぶを
何のほだしの花に残りて
可愛し、紅葉手、枝にのばすや

浮世の兒等が清き眼に
み空の星のしはじ天降りて
かばかり切きに花戀はしむを
折りても贈らんに、掟破るも

八

花たろがる、春の霞に
晚鐘重うしめり亘れば
消ゆる響に心をのせて
人かへり去る木の下暗を
落花あはれや風にもまるゝ

屍散り布く木の間の夕
迷ふか花魂吹き溜められて
あゝ去りがてに花の吹雪の
幹より幹に梢の下を
夜すがら迷ふ恨を知るや

梅 若葉

梅 若葉

蘆の芽の角くむ河の淀にして鶺鴒あひこ洗ふ花のねほろ
夜 清 子

沙清き九十九里濱の朧夜に戀知り初めて蛩せむしの子
唄ふ

れほろなる月面白き花の道、若き男の何をさ
めく

あさもよし紀の路に越ゆる峠路み山煙りて春雨
のふる

世に久遠散らぬ花のありせば

六

被る編笠人を厭へど
樂しければぞ春の彌生を
浮いたりな輕う日光に酔ひて
糸のもつれに花を縫ひ行く
誰ぞ夫婦連、三味線かゝえたる

玉の緒張りて戀にかく音か
もつれ流るゝ雌雄めづの二すじ
花をくゞりて睦れひゞくも
連れ弾く六すじ根じめ細さを
切れてあらんや花も散る世に

七

あゝら痛ましおきな姫七十路
手とらん孫の早う逝さしや
腰危げに杖にすがりて
み経誦するか口をかしげに
花の木陰をつぶやさ去るよ

花散り葉散り枯木立のみ
冬ぞら痛き風にれのゝく
いづれ逃れぬ悲慘に泣くか
ほろり花辨はな梢を落ちて
霜髪さむきおきな煙にかゝる

我妹と桃見歸りの渡舟水澄めらばや影見てまし

舟とめて昔語れよ渡守永き春日をあくがるゝ身

白雲は馬の頭にむら立つや木曾の山々藤波高

藤棚の下の池水うす濁り何のやつれど影見むも

松並木行けば濱邊の小柴垣夕月やみに山吹匂

目をとぢて聞かじとすれど幾十度胸とどろかす

春の囁めき
堪へやらぬ思を胸に抑へつゝ緑なす野に春を送

若葉深き門邊によりて稚子一人星合の空に何を
待らん

新刊紹介

●佛教信仰談

小川獨笑居士述

近頃世に持難き、小川宗と小川派とか云ふ小川老翁の述にして、題して信
仰談と云ふも其實多くの法語類を集め、箇に所感を加えたるに過ぎず。これ吾人
の本書に接して失望せし所以也。殊に著者の序文の如きは拙劣見るに堪えず、其
信仰談の如きは漢として捕提するに苦む。思ふに筆を執りて遺憾なく其所信を傾
注するが如きは筆の能くせざる所なるべし。翁は筆の人にあらずして手の人なら
む。口の人にあらずして行の人なるべし。邊陲の九州草深き田舎にありて尙多く

の信徒を有し、小川宗など、稍々人に知らるゝ所以必ず他に異なるものあるを信ず。本書を讀みて失望せしもの豈た吾人のみならずや。只吾人は多くの聖教を自由に咀嚼したる點には深く感ずるもの也。吾人の此書にとるべきものたゞ此一事あるのみ。製本の堅牢にして印刷の鮮明なる京都の出版と見えざる程也。(六十五、京都法藏館)

◎他力宗教論

楠 龍 造 著

自力の教、他力の教。これ佛教の二大關門也。自力に倣いて信仰を得ずば去りて他力の大道によるべし。然れども著者の此書は更に進みて自力の究極は遂に他力の一道に歸することを説きたるもの也。他力とは何ぞや、小我を捨て、大我に歸することなり。自力を拂却して他力に歸することなり。自己を没却して絶對に歸することこれ也。本書の主眼亦此にあり。而して他力信仰は宗教の極致なるを説き、更に他力信仰の經過を述べて其地位並に使命に論及し、井然として一絲不紊れず、文に波瀾あり、筆に起伏あり。他力宗教の大觀こゝに至りて極まる。豈たゞ文の妙なるのみならず、他力信仰の活現たる偉人の性格を抽寫して、千古活きたる信念を鼓吹せしむ、著者の勞多とすべき也。抑々佛教の難易二道の判釋は龍樹菩薩に始まると云ふ。龍樹を專攻する著者によりて此著あり、本書の價値いはずして知るべき也。(三十五、東京文明堂)

◎明治の伽喃

巖谷 小波 作

これは第九編として發刊せられたるもの也。十二支の中、馬、羊、猪、西、犬、猪に就ての物語なるが、就中猪が水中の月を捕へんとして過ちて水に落ちたるか如き一話最も興を引くものとす。附録として以上十二支に就て教訓的のお伽喃を收む。其教訓も兒童に對して稍々難解を免れざるを惜む。(拾二、東京博文館)

◎法螺くらくら

巖谷 小波 作

世界お伽喃の五十六編にして佛國の物語也。チャーレス王と土古古のユーゴー王と會見の時チャーレス王に十二人の大将ありて一夜の法螺くらくらが仇となり、端なくユーゴー王に間に其實行を迫られたる、最も變化ある、曲折ある筋書也。此複雑なる筋書を簡潔に編寫せられたるは、流石に著者の手腕にして感服に堪へざる所也。(八、東京博文館)

◎戦時佛教演説

河崎 顯了 述

日露の戦争は我邦有史以來の大事變也。此際此時我國民たるものに士氣を鼓舞して、最後の勝利と名譽を収めざるべからず。本書は京都真宗中學院に教鞭をもち、河崎氏の著にして佛教の見地よりして戦時に於ける覺悟を説いて、勸告一語國民を警醒せられたり。時節柄好著述たるを失はず(拾二、東京法藏館)

◎戦争法話

河崎 顯了 述

本書は兩木順寺法主の直説を始めとして、教界知名の戦時の心得に關する法話を集めたるもの、傳道者の一讀すべきものとす(全上)

此の名譽ある要求は該市に於て活潑に歡迎され、加ふるにバセ市教育會長の満腹の好意を寄せらるゝありて立處に斯學専門諸氏の團體は結成され、直に快諾の旨を報じ來れり。尋てフレイル、バルトレイ兩博士を委員長に推し、かくてバセ大會の組織は完成せり。

そも一般宗教史の如き新進科學に關し其の研究法及び其の從來の成績を問題として、東西斯學有爲熱心の専門家が濟々一堂に相會して、手を取て蘊蓄を披瀝し膝を接して思想を交換するの舉は、其結果頗る尊重すべきものあるべきは何人も疑を容れざる所なり。今やバセ市は此の神聖なる舉に向て着々準備の歩を進めつゝあり。若し夫れバセ市に望むに彼の巴里に開かれたる第一回の如き遺憾なき設備を以てせば或は難きを責むるの嫌なしとせず、然れども吾人は他の方面よりして此際寧ろ一層大なる望を囑し得べきものあるべきを信ず、蓋し比較的大ならざる都會は比較的人心靜謐なるを以て全市一致克く慎重に熱心に這般公共的の事業に向て意思を集中することの頗る出來易きものあるべきを信ずればなり。要之、來會諸賢の有力なる贊助に由て、來るバセ大會も亦幸に活潑なる進歩を遂げ、斯學研究の發達に少なからざる貢献を齎來せんことを決して吾人の空想にあらざるべし。最後に吾人は一千八百九十七年ストックホルム大會并に一千九百年巴里大會と同じく、來るバセ大會も亦全然學術的會議にして専ら宗教の歴史研究を以て任じ、信仰上の爭論に至りては一切之を嚴禁すべきことを明言す。

開期、本年八月三十日より九月二日に至る。巴里大會の前列に由れば、先づ總會に於て議題全体に亘りて一通り説明を與へ。續て別會を開き個々の宗教を取りて議題と爲し、逐次之を審議す。

議題、一、所謂「自然人」(秘露人、及び墨西哥人を含む)の宗教、二、支那人及び日本人の宗教

◎七祖の大綱 齋藤 唯信 述
本書は後編にして昨三十六年度關八州會に於て講ぜられたるもの、盛靈、道經、華琳、源信、法然の五祖の略傳及教理を收めたり。其梗概を知らむと欲する人に極めて便益なる著述也(二十五、東京關八州會)

◎奉公美談

井上 秋劍 編

愛國心を鼓舞するには國家有事の時最も可なりとす。此奉公美談の如き讀むものをして直に義勇奉公の念を感起興奮せしむるに於て欠くべからざるもの。蓋し軍國の著書として歡迎すべきものの一也。(二十、東京永島書店)

◎新に寄せられたる雜誌

日本橋 直 行 社

海外事情

第二回万国宗教史大會

同會は本年八月三十日より九月二日に至る四日間佛國パリ市に於て開かるゝこととなり今より五年前第一回を巴里に開かれたる時近角學士之に出席して日本佛教徒選の概要を紹介されしが、今其第二回を開かるゝに至り依て其委内狀の要領を左に譯出して讀者と共に歐西最近思潮の一潮を瞥見せんと欲す

万国宗教史大會の第一回は去る一千九百年巴里世界博覽會開設中に開かれたり。爾來本會の關與者は何れも本會は將來必ず愉快なる効果を收むべきの確信を以て事に従ひつゝあり、當時アルバー、レヴィ、ユ教授以下十名より成れる大會事務局に向て、エストリン、カーペンター氏以下五名より組織せられたる委員會より次回の大會開設地の撰定及び其地に於ける開設準備に關する問題の提起せらるゝや、委員諸氏の視線は已に期せずして齊しくバセ市に集注せられたりしを以て、巴里大會の會長アルバー、レヴィ、ユ教授は一千九百二年三月十二日を以て此の旨趣を具してバセ市に交渉せられしに、

- 三、埃及人の宗教
 - 四、該國人の宗教
 - 五、印度人及び愛爾蘭人の宗教
 - 六、希臘人及び羅馬人の宗教
 - 七、日耳曼人、聖爾的人、及び須制勃、亞人の宗教
 - 八、基督教
- 大會入場券を分て二種とす、
第一種、大會列席券(寄附金二十法)大會に列席して、演説及び討論をなすとを得。
第二種、傍聽券(寄附金十法)

大會出席者はアルフレッド、バルトレイ教授宛に通知せられ同時に各自何れの宗教に最温き同情を有せらるゝかを明示せられむことを望む。尚總會并に別會に於ける講演も同教授宛に豫め通知せられむ事を望む、講演申込の多少は固より豫知し難きことなるが講演者は講演の要領を認め置き講演後直に之を大會事務局へ提出せられむことを望む、大會は印刷に附して之を公にすべし。
大會に於ける用語は、獨、佛、英、伊の四箇國語に定む。
大會委員列名(略之)

政教時報

○日曜講話

▲三月廿七日(第十一回) 本日は月の最終にして談話會あるを以て、出演者は曉鳥啟氏一人なりき。同氏は死の問題と宗教に就て委しく述べられたり。要は人生は死の解決を以て最後の解決なりとし、而して宗教は死の關門を打ちひらくべき鍵なることを、例を擧げて明白に語られたり。本日の聽衆は平日に比して割合に動なかりき。直に談話會に入る。

○談話會(第三回) 主題は曉鳥氏の死の問題に就て最も多く談話されたり、曉鳥氏は歸省中自らの懺悔を打ち明けて、高慢の心の悔むべきことを語られ、萩野氏は怒に付て最も大切なことを述べて、大に満足を得て、これにて閉會を告げぬ。時に

前十一時半なりき。
 ▲四月三日(第十二回) 荻野仲三郎氏は此日他に所用あるを以て、時局問題に就て簡単に述ぶる所あり、出征者の遺族に對して獨り衣食問題を以て足れりとせず進んで心慰上の慰籍を興ふるに刻下の急務なるを説かれたり。次に佐々木月樵氏は三寶に就て語りたり。三寶(佛法、僧)の見方に就て信仰の道に入る方法を述べ、頗る耳新しく感ぜられたり。此日聴衆五十名ありなりき。

▲四月十日(第十三回) 楠龍造氏は鑑真和尚の傳に就て語りたり、曰く和尚は幾度日本に渡來して法を傳へんとし、海に航したるも、風波險惡にして屢々墜散したるにも拘らず、其燃ゆるが如き熱誠通たりけむ、遂に無事日本に渡りて宗旨を遂げられたる古大徳の勇猛精進の物語なりき。次に和田那氏は道を求むるには自力、他力の兩方面あるが如し、自力に進まむとするものほゞこゝまで進んで足の疲るゝまで進むべし。而して之にて満足を得ば幸なり。而してこれにて満足を得ずる時は始めて自己は薄弱なるものと感ず、自己の價値を没却して絶對の他力に依憑すべし。若し自力にもあらず、他力にもあらず何れにもあらず人は殆ど求道心なきものにして論外なれども、更に自力にもあらず何れにも進まむとして二股かける人は切實に道を求むる態度にあらず、かゝる人はイッ／＼までも信仰の堂奥に入るに能はざる所以を諒々として述べられたり。聴衆前回と略ぼ同下かりき。

▲四月十七日(第十四回) 曾我量深氏は攻と守と題して、物質的に於ける攻と守との態度は何か優勢なるや容易に判断すべからざるも、心靈上に於ける攻と守との優勢は忽ちにして列せらるゝものにして、即ち自身の立脚地を曖昧にして他を攻むるよりは、心算内に根柢を築き守るとの容易なる決して他を攻むるの比にあらざり、根柢とは何ぞ、上に憑る力也、即ち佛の力なり。これがあるが故に心靈内に築かれたる城は天險此なきものにして、以て枕を高くし得る所以を述べられたり。次に齋藤唯信氏は日露戦争以來寺院の門前に處勝利祈禱の門札を見ざるなし、これ果して佛教の眞意なるか、若し感應の理よりせば感は能感の機、應は能應の佛と稱するから祈禱決して不可にあらず、天台にては妙の字の解釋に二十種もあるが、其中に感應妙を説いてある。眞言にては入我我入と説き我は佛に入るか。佛は我に入るか、所謂感應の作用ならざるはなし、淨土眞宗にては光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨と云ふ、これを善導釋して三緣とし、玉ふ。

例へば水は月影を宿すが如く、親は子と思ふが如く皆これ感應と云ふべし。此意味に於ける祈禱決して不可なるとなし難も、稍もすれば息災延命のためにて之を利用するものあり、弊害全くにあり。故に之をなすべし、たゞ向上の一路に進まむとして佛を念し、佛に祈るは獨り不可なるのみならず、苟も宇宙の大靈と冥合し、佛陀と同一休たむとするの大勇猛心を呼び起し、祈請祈願をなす正に其所也云々簡潔にして要を得たる講話なりき。
 ▲談話會(女子部) 此日午後二時より有志婦人の談話會ありたり。荻野仲三郎氏

に非ず猶紙の表裏の如し、恰も火を熾すにも消すにも同しく吹くといふ作用を以てするなり、唯一の精神作用なるも遂に全く異なるか如き殺活の二大流として顯はれ来る、彼の日清戦役の當時に於て佐藤軍醫と李鴻章との問答は實に能く此意味を解けり、李氏(佐藤軍醫)に問て曰く「君は軍醫なり然るに何ぞ人を殺すの劍を持するや」と軍醫佐藤氏直ちに答へて曰く「我持する劍は決して人を殺すの劍に非ず人を活すの劍なり」と、實に戦争といへば人を殺す、事のみ思ひ浮ぶれども其要には必ず平和といへる人を活かす事實あるなり、殺活の意を宗教上より見ると全く同意味なり、全休宗教上にては一切法に向て無我といふ、此無我とは即忘想の如く捨唯せらるれと、こゝが活殺二にして全く一なる所以、無我とは即忘想の小我を捨て絶對の大我を認むるに在るなり、此大我こそ實に總ての方面に向ふて活動を生起せしむる源泉なり、方寸の殺活は此無我なる精神上の殺活をいふなり誠に精神は小なるものゝ如くなれど一度信念を開發し忘想の小我を脱脚する時は同時に大活動は起るなり、最後此方寸の殺活といふ意を最明にする爲に道元禪師の語を言いん其語に曰く體過于密遺金拾於道途是一塊金石と人間は時に野卑なる精神が起らざるも限らず然し此一刹那が實に吾人の精神が金となるか石となるかの境目なり、一步を誤らば精神を墮落の淵に投し正しく向上の道を進まば偉大なる活動は自ら生ずるなり當日曇天來聴者漸く二十名

三月十九日 第十六回 石川成章氏出席
 表裏相照
 ○當日の講話は已に載せて求道第三號に在り特志の諸君は該號を御覽ありし、當日は雨天なりしを以て聴者僅かに二十名に過ぎざりき
 三月廿六日
 四月二日
 右両回共俱樂部申請中なりしを以て休講せり
 四月九日 第十六回 佐々木月樵氏出席
 ○講話 親鸞上人と釋尊の信仰の比較
 ○大意 先づ類似の點なりとして出家の動機の等しく死の問題にありし事、共に十九歳なりし事を擧げ次に相反點なりとして釋尊は唯我獨尊といひ或は三界皆我有也等といはれ正に自力の極點、然るに親鸞上人は爲に反して底下の愚鈍といひ或は阿彌陀如來の超越永劫の御修業皆此親鸞一人か爲なり等といはれ實に他力の極點なり、然るに此大反對の點が又大に一致するものなる事を述べらる當日晴天なりしも風烈し來聴者二十餘名
 四月十六日 第十回 石川成章氏出席
 ○講話 光
 當日の講話は求道に掲載せらるべければ茲に省けり
 當日雨天來聴者二十名 第十八回
 四月廿三日

出席、先づ釋尊の傳に就いて語る所あり。後ち相互の所感を披瀝して信仰の經驗を告白せられたり。或は怒の心は如何にして抑へらるべきか。或は邪推の念は如何にして驅逐し得べきか。一旦佛の慈悲を感ずると兎角佛と離れ易し、こは如何にして呼び得らるべきか、或は信仰を得たる後ちと雖も、時々煩惱の起るもあり、これ未だ信仰の堂奥に達せざる微なきべきか等の談話にして、何れも適切なる經驗の泉より進り出てたる響なりき。追々會をかきかねむ哉。此日は堅固なる信仰の城は打ち築かれ、長へに佛の光明に擁護せらるるを得む哉。此日は堅固なる長閑けき春風は此室より溢れ出てぬ。因に云ふ此談話會は毎月三日の日曜日(午後)を定日とす、婦人の方なければ何人たるを問はず出席し得るなり
 ▲四月廿四日(第十五回) 北村教嚴氏は佛と人の關係に就て一時間辯せられたり。吾人は有限にして佛は無量なり、佛の位に進まむとすれば、有限の吾等はさうしても無限の力に及らざるべからざる所以を説かれぬ。講述の要旨は本誌上に掲載するゝ筈なり。次に佐々木月樵氏は小なる我、大なる我の演題に就て述べられたり。曰く、吾等は小なる我をなすて、大なる我に進まざるべからず。曰く、私は幼年の時より、佛教の教理や註釋をき、佛の攝理や、救済の事に就ては其感極めて薄病なりき。恐く諸君も亦然らむ。曰く、何事も唯然りと信ず佛の命のまゝ進まねばならぬとて、修養に就て三種の方法を擧げて極めて詳細に有益なる講話を試みられたり、當日は今日最終の講話にして、信仰談話會の日なりしも、講話の時間意外に長かりしを以て談話會をひらく時間なかりしを以てこれにて閉會す。

○第一求道會講話錄

三月五日 第十四回 近角常親氏出席
 ○講話 修養の時機
 ○大意 今日の氣運は徒らに無意味の講究を爲すべき時に非して實に活ける信仰を獲得すべき時機となり來り、近來は自分自ら各地に於て現に信仰を得たりといふ人に接する事多しとして二三の實例を引き來りて明かに時機の求めざる事を示され殊に今日如く國家多端の時節には層一層眞面目になりて道を求めざる修養を怠るべからず、而して修養の第一若歩は佛陀の大慈悲の感得にあり若しこれか感得なければ吾人は到底修養し得られざるべし。當日は生憎雨天なりしにも係はず五十餘名の來聴者ありたりしは亦先生の言空しからざるを證すべき歟
 三月十二日 第十五回 楠秀丸氏出席
 近角先生は曩に尊父の不例危特の報に接せられ不得止歸國せられしを以て
 ○講話 方寸の殺活
 ○大意 殺活といふは精神の二大潮流として顯はる、殺活といふも本來動物なる

○講話 佛と人の關係 北村教嚴氏出席
 ○大意 佛の光を太陽の光に譬へて講話せられたり、佛教の門多しと雖も佛性を極むるといふより外なし、然るに吾人は煩惱の爲に蓋はれて佛性を仰ぐ事を爲さず冥り冥りに入るの生活を爲せり、然し吾人の前にも太陽の光あるか見る如く罪重く惡業深き者の前にも佛陀の大慈悲光は暫くも止む時なく照せらるるなり、只因縁を密閉して朝寝坊を爲せる者には太陽の東天に輝けるも到底知られざりたり、然らば如何にして吾人は此佛光即佛性を見るかといはば大信心にあり、親鸞上人の和讃にも信心ヨロコボソノ人ナ如來ト等シト説き玉フ大信心ハ佛性ナ、佛性スナハチ如來ナリとあり、吾人は相共に此大信心によりて始めて光善无量慈悲無限の佛陀に接するを得
 當日晴天來聴者三十餘名

編輯餘錄

◎宗教家大會は本月十六日を以て東京に於て開催せらるべしとの事に候。發起者の顔觸は佛の南條、前田、村上、耶の海老名、本多等の諸大家にて、其他平生宗教問題に深き關係を有する井上、姉崎等の諸氏も相見を候。而して之か趣意書はすでに發表せられ候。乃ち左の如し。
 惟ふに開戦以來我軍の光輝ある活動と國民の弊質なる態度とは大に與國の同情を惹きたるものあり、然れども此際注意すべきは外にしては此機に乗じて人種黃白の別を唱へ我國をして列國同儕の圈外に立たしめんとするもの或は又宗教の異同を口實とし、歐米に十字軍的思想を傳播する者有ることにして之を内にしては排外思想の爲又は教派の爲めに同様の言動を表はして敵愾の心を偏局に走らし、國民の愛國心を宗派私利の具に濫用せんとする者ある事是なり、吾等宗教家たる者の輩すべきは、此際一方には各其の信仰によりて人心を導き人を安んずるの道を履ましむると共に、他には各派傳來の別を離れ博く人道の爲めに盡す宗教の本義に基き、博愛平和の大道を擴充すべきに在り、即ち外は友邦の民を以て人種教派の偏見を脱して我國が正義と平和との爲に之の戦を起したるの本旨を諒せしめ、内は偏狹なる敵愾心と教派反目的の情を撲滅し、眞正なる舉國一致の上に光榮ある平和を克復するの道を講せざる可らず、則ち和戦共に國民をして立つ處を覺らしめ向ふ所を知らしむるは我等宗教家の天職ならずとせんや、この天職を果さんとせば先づ時局に對する各宗教家の意見を交換し、併せて意志の疎通と交情の増進とを計らんが爲に宗教家懇話大會を開催するは蓋刻下の急務たるべし、若し此會合によりて正義と平和と

の爲に戦へる國民の正大なる意氣を明にし、此に依て宗教的人種的偏見に出づる内外の迷夢を覺醒する事を得ば社會の福祉を増進する望鮮少ならんや。云々聞く處によればこれが動機は、曩頃英國に航したる末松博士の注意に出でたるものなりとの噂有之候。知らず果して好良なる結果を收むべきや否や。

●郷里に在りて父の喪に籠りたる近角氏はすでに先月にて忌明と相成候。今月一日金澤第四高等學校有志の催しにかゝる釋尊降誕會に臨まれ、一旦郷里に歸りて直に上京の筈に候、多分六七日頃かと存候。

●高輪黨と云はるゝ前田博士以下七名近頃破門の宣告を受けられ候。今後の諸氏の立場こそ恬目すべし價有之候事と存候。

●大谷派新法主はこの度三週間位の豫定を以て越後巡化の途に上らるゝよし、南條博士隨ふべしとの事に候。

●前田博士近作の所感に曰く、半生多是客中銷、故國雲遮夢路遙、燕子有情期社到、柳花無頼任風飄、坎軻處世不嫌險、貧賤交人亦欲驕、宿好在書難擲得、青灯白髮照深宵と頗る感慨深きもの有之候。

●戦争開始の當時は、一時犯罪者が減少を來したるとの事なるが、以來勤儉の聲高まり、凡ての事業が繰延となり、地方税の縮少となり、殊に土木工事には影響を及ぼしたる事として、勞働者の困難一方ならざるべしとの事に候。爲に職業を失したるものは苦しまぎれに竊盜其他の犯罪をなすもの、早晚増加を見るべしとの事に候。當路者の一考を煩はし度候。

●米國のマッキー夫人其部下を率ゐて渡來し、其博愛事業に滿身を捧けて盡さむとの念、我等はたゞ我同胞に代りて感謝の辭あるのみに候。而して其勤務地は松山赤十字病院の由に候。

●仙臺第二高道交會にては、來る二十二日を以て盛大なる釋尊降誕會を執行せらるゝとの事に候。

國たる露西亞に對し、勇敢にして耳を被ふに遠あらざる程の急進なる大襲撃は歐米各國の軍事者をして顔色なからしめたり。此に於て吾人の念頭に湧起し來たる問題は、他なし歐米各國中機敏にして誠實勇敢にして、尤も果斷力に富める日本海軍隊と海上に争ひ、之れに打ち勝つもの果していつれの國や、日本海軍に比較して劣るもの露國海軍のみなりとするか、吾人は大いに然らずと思ふ。現今地球上に於て海軍力を以て誇る各國も一度日本と海戦を交へば、一として露國の覆轍を踏まざるものなからん。否海軍のみならず陸軍に於ても或は然らんと思ふ。

遺版日本海軍の大勝利は非常なるレツクンを教へたり。之れまで唯一無二の戦器と思はれしものも意外に用をなさず。また些の注意も留めざりしものか、俄然として最上の戦器となれり。強大なる海軍とは何か云ふや、徒らに軍艦の多少と大小とに關せずして、艦質の好良なることと高等教育を享けたる士官と訓練に於て些の遺憾なき兵士と之れ等の諸條件相俟つて成れる艦隊の一致を要素とす。此所論は直に之れを陸軍にも應用し得べし。日本の陸軍は今進軍の最中にて未だ接戦の報に接せずと雖も、矢張りそれの如く陸軍も一の欠如たる點なしと吾人は思ふ。

吾人は海軍の第一義たる要素について論じたり。此點より觀察し來れば過る頃露西亞艦隊が旅順口及び仁川沖に於て演したる大失体は、其根本が第一彼等が日本人に比較して頭腦の不足なること、訓練の欠けたること及び外交談判破裂の際に當つて尤も欠くからざる戦備準備に怠りたるに依ることこれなり。露西亞海軍々人は日本のそれに如かざるは丁度露西亞海軍の米國のうれに及びさりか如し。(譯者云ふ米國は西班牙の今日の如き軍備の不整頓なる國を對手にして莫大の金と多く目子を費して漸くにして西班牙領たる比律賓を併呑した米國海軍を日本の海軍力と同一に見るは甚だ自惚れと云ふべし)日米海軍酷似の點なきとせず。而かも御門帝國の今日あるを致せば實に米國人に據るなり。

強大なる軍艦と大砲とは金錢を以て購求すること易々たるべし。而かも戦時に當つて最も必要とするところの軍人の勇敢と精銳とは金を以てまた如何ともすへきものにあらざるなり。今暇か四方に嚮して視るに日本海軍の敵として價値なきものは、獨り露西亞

●樺太回復同盟會は在野政治家の手によりて組織致され候其要旨は左の如くに候。

●戦後我が要求すべきもの(一)旅順の占領(二)滿洲の開放(三)韓國の保護(四)營義鐵道の布設權獲得(五)島嶼の占領(六)沿海州の領有(七)西比利亞鐵道列國の共有(八)軍費の請求其他種々あるべしと雖も是等は元より戦捷状態の如何、國交相損の都合により時に取捨あるべし然り而して樺太島を回復するの一事は如何なる場合に於ても之を譲歩すべからず是れ一は我が久しく隱忍せし國辱を雪ぎ、一は我が民族の生存上最大必要事となす所なればなり

●我軍鴨綠江を渡りてやすくと九連城を占領し此に名譽の第一捷を博し候。國民は官敷歡呼して萬歳を唱へて可也。

●葉は緑にして、風涼しく、氣は爽快を覺え候。讀者諸君の健康を祈り候。 早々

米國だより

日露交渉の諸なる頃國民の輿論は露國を自して世界の侵略者なりと罵り、日本の主張を正當なりと絶叫せり。然るに露國一發旅順の海戦傳へられ日本の戦捷報せらるゝや、殆ど自國が他國に打ち勝つたる如く奮踊さしてジャパニスム、グッド、ファイヤ(日本人勝利)の聲は到る處に喧傳せられたり。爾後頗々として傳へらるゝものは日本の勝戦にあらざるなく、某米人余に語つて云はく比律賓征伐のときてすら、國民は如斯き狂喜せざりしと。此の一言を以て推すも米國民がいかに日本に同情を寄せつゝあるかを推するに難からざるべし。

今や彼等の大部分は露國を嫌惡すること蛇蝎の如く、新聞は露國を諷して自ら求めんと欲すれば、正當なる道を連れ、理由なき欲望は神之れに幸せず嘲笑せり。之れに反して日本を自するに厚誼國として日本人を視るに恰も同邦人の如く寛待せり。

旅順戦争に於て我が海軍が偉大の功果を顯せしと同時に、海戦以前までは日本は日東の一小國、露西亞は世界に於ける大國。果して此一小島國が世界の大陸に當るべき實力あるや否やと嘲笑せし新聞すら、此頃には多大の同情とあらゆる賛辭を以て、日本を尊稱するに至れり。即ち左に譯するは其一なり。

過去三四十年前までは其名さへ記憶するものなかりし日本人が、今や世界の大的のみならんや。軍艦の數の多きを以て尊大に據ゆる歐洲の各國も、白地云ひは畢竟自己の價値を辨へざる自惚のみ。日本海軍の砲火と其艦艇の精銳とは唯かに地球面上を振動せしむる價値あることは吾人は信じて疑はざるなり。

サンフランシスコ、ホークス八〇七

青柳廣 撰

求道第一號着仕候、小弟は第一に其改題を甚た難有覺え候。卷中に躍々たる老兄の鬚眉に至りては、燈下の益友として此上も無之候。讀餘、目下或事情にて煩悶致居候某氏に惠を與へ候。大悲の恩寵幸に彼人の下らむことを希望仕候。

三十七年三月十八日
すらすらばるくにて
海 旭

戦國布教の最新材料はこれ

一 求道者は此一大珍書を翫味せよ

小川獨笑
居士著

一心大佛敎信仰談

菊判三百五十頁
上製金六十五錢
郵税十錢
並製金五十錢
郵税八錢

邊陲念佛の一野翁能々天下の衆人と偉人の感化は既に何人も怪む所
蓋し翁が實驗の信仰より獲得せし信心正因稱名報謝の新旗幟を掲げ
批難駁論世に轟々たる小川宗小川派の聲高く遠近に歡傳せらるる、恰も野宗敎革
命の先鋒と呼ぶに至りぬ、而し法語集は僅かに親近秘藏密傳せられて、
真相を知るもの少きは甚だ遺憾とす、精選法語要文五十余編を集ぬ、廣く天
る處なかりしも今や本館に許して、**精選法語要文**下に發表せしむ眞に是れ翁の
信仰精髓の後には必ずや**現時敎界の耳目を驚倒し萬人の**

視線此に集

發行所 東京都東六條(電話二二五八番) **法藏館**
東京本郷四丁目文芸堂 京都西六條興敎書店 東六條護法館
同麻布飯倉町森江書店 同 顯道書院

戦時敎材 第一編 戦争法話 全一冊 (三月二十日既刊) 定價 四拾錢

征露の大戦難や國民の眼前に横れる時、南條法將進ん 敎壇に現れ滿腔の赤誠熱血を吐き壯烈に義
勇奉公の志氣を鼓舞し、或熱心に國民後援の大覺悟を説き懇切に勤儉救恤慰安等の用意
を教示したる者は本世也加之、宣戰詔勅、東四十五垂示御聖訓等必讀の要文數篇を掲ぐ此際本書を讀むを好まぬ國民は、佛敎信徒中一人もあ
らざるや、と信す、要義に熟し給ふ布敎家に於てをや敢て愛國護法の公衆に稱讚を促す

戦時敎材 第二編 戦時佛敎演説 全一冊 (四月二十日發行) 定價 四拾錢

舉國戦難の時佛敎的義勇奉公の態度なし、著者は雄辯演説の 驍將今つ 驍然 單騎陣頭に立ち 佛敎の
十餘の 利害の精利婦女の貨務 死生問題 聖經聖典に據り新古の事例を引 縦横説破し眞に其國民急要の 心的軍
備を備へるの探海燈也若し布敎家に於ては、百萬の後援を得感あり

戦時敎材 第三編 戦時佛敎資料 全一冊 (五月十日發行) 定價 四拾錢

戦争に武器を要す 布敎に必要は精妙な新資料也、諸大家が著書雜説敎書に出せる戦時適明の信仰談、修養措
拾網羅し悉し、次に日清戦争美談數十篇を掲げ、古名将の信念、戦時集を、戦争に對し、説聖訓を集めて遺
稿なし、實に滿裏の好材料を供給すると共に、佛敎の戦争觀ハノヲマ也

戰時教材
第四編
田淵靜雄著

軍國朝家と念佛

全一冊 (五月十日發行)
定價 貳拾錢
郵税 四錢

戰亂修補の甚しき生死無常の眼前に逼るる念佛鼓吹の好時運に觀る有り朝家の爲國民の爲念佛申すべし
の聖訓を掲げ其宗旨の忠告愛國の勇勳倫其他戰非國民の覺悟を 念佛法主義の戰時に於ける如來の大覺悟とする者時機相應の教化する者觀覺
聖人が 念佛法奉公の大精神を此に發

(見よ) 戰時に於ける家庭のよみもの

京華主筆

日露戰爭 驚退治

(四月二日發行)
定價 五錢 郵税 貳錢
四六版 美裝

松本雪城著

(讀め) 戰時に於ける家庭のよみもの

本書は著者が佛教徒として觀したる日露戰爭の結果を比較的の材料として記述したるものにして即實痛快の國民の元氣を鼓舞すべく
正義の美風を發揮すべし其佛教徒たることと云ふは問家庭の教育に注意すべし此際是非共一本を學ば彼等自身に讀
しむるの必要あり幸に愛國家の爲め
讀者の多大なる人事を 國家の爲め

發行所

京都市東區六條
(電話二二五八番)

法藏館

賣捌所 東京 文明堂 法藏館 京都 法藏館

羽花仙史 澁江保先生著

▲四六版
三百五十頁餘
▲正價
金四十五錢

露西亞闇黒史

▲正價
金四十五錢
▲郵税金 六錢
四月一日發行

露國の事情を知るとは讀者は讀よ

本書は露國累代の帝王、皇后、皇子、皇女が多淫多慾にして
醜聲外に聞え、殘忍苛虐にして、恐るべし慘劇を演し爲に帝室の
紊亂を來した衆怨の府となれ大小官吏が腐敗の極に達し黃白
の爲に是非を顛倒し良民を苦しむるに一般人民が懶惰淫靡
にして風俗を壞亂せしむるに説き起して同地が寒氣烈しく地味瘠
てし動物の生長に過せず其結果として酒色に沈溺する惡習を醸
たること奇談珍説 悉く巻中に 露國の事情 欲する者は必ず一讀せよ
ざるの書なり

發行所

東京本郷四丁目五番地

文明堂

文學士 近角常觀氏著

信仰問題

(新刊)

人、苦悶を経て、初めて人生の眞意義を悟り世界慘憺たる舞臺を過ぎて、終に靈の光明を鑒るは已に曉天に響き、國民發揮す、今や「信仰問題」の鐘聲は絶大の自覺を生じて火血の間に一大修養の震雷劇雨を劈くの後、功を積まむとす。

震雷劇雨

本挿入 眞寫 入葉

- ▲米國シカゴ青年會館
- ▲英國議院及ツエントミンスター伽藍
- ▲ワルトブルヒ城中ルーテル聖書講譯室
- ▲巴里に於ける萬國宗教大會
- ▲獨逸宗教改革の遺跡の圖五個

清淨界

を出現せむ、國民信仰の地盤に立

鍛鍊陶冶

世界に於て最大理想を現實するの

此の靈的

需要に應ず、實に本書なり。

▲菊版二百六十頁 製本高尚。
▲上製價六十五錢並製價五十錢郵税八錢

發兌元

東京本郷四丁目 電話下谷(三〇二九) 文明堂

賣捌所

東京本郷森川町一番地 求道發行所

規定

- 一、本誌は毎月一回(一日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべし
- 一、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

- 廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢
- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
- 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十七年四月三十日印刷
明治三十七年五月一日發行

發行所

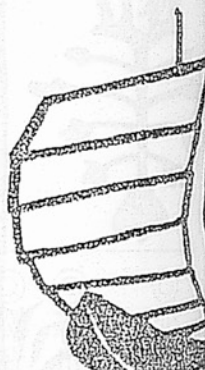
東京市本郷區森川町一番地 求道發行所 (電話下谷二四三三)

大賣捌所

東京市神田區神保町 東 京 堂

同

本郷四丁目 文 明 堂



譬如天下大海水

一人斗量之一劫不

止尙可枯盡令空得

其泥溼人至心求道

何如當不可得乎

求索精進不休止

會當得心中所欲願爾

《大同彌陀經》

